

者只一偏に武を
張り士氣を振は
しめんとするの
潮勢ある時の書
なり

之地嚴斗一定不仕内は色々變動可仕何分御大切之御時節と奉存候被
仰下候通是迄積年之御講學人心に深染いたし居候事を得ば終には御
一定之地に罷成可申候此間助長は大切なれ共又大に力を入れねばな
らぬ事御心配之御事萬端奉察候何分君側に一大人無御坐候てはなり
不申願くは當年中にも鈴木君御歸役に相成度御事真に神明に祈申候
近來は西洋之變動其沙汰紛々と有之定而夏中には浦賀へ参り可申候
去れは彌益天下之勢武てなければならぬと士氣を興すと一偏之所に
参り可申候成程士氣を興し武備嚴重にならぬは決して相成不申候得
共此一偏に根本定候得は甚以恐敷事に御坐候先便村田君列に文武一
途之説と申候一通指上申候或は御一覽なされ候半唯武事を起し候者
大成る相違にて御坐候聖賢豪傑心術事業一致に参り治にも亂にも常
にも變にも一偏ならざる修行尤以此學の心得と奉存候如何々々
水府の事は飛立計に大慶存候然し復の一爰甚以氣遣しく聊心付候筋

先便藤田へ申遣候とふそ好き返書参り候えかしと希候此許同社中不
相替天分盛に相成申候柳川同様と申内是は餘程面白き起りにて御坐
候只今通りに候得者一藩中に及び可申勢に相見悦申候池邊一人之力
にて此人は彌以修勵進歩に相成申候近日に此許に参り申等に候左候
得は萬端咄合可申候此段拜呈餘は後便に付申候已上

五月三日

外寇之一條前條之通彌以變動可有之奉存候長崎表杯は殊の外秘密に
相成扱々氣の毒千萬に奉存候北條時宗か蒙古之使者を首切り天下に
令して逆寄之打立いたしたるとは天地之懸隔真に嘆息々々
梅田至困に付御助力被成候由御厚情之御事に奉存候此人不相替偏固
に御坐候段迷惑成る人物扱々笑止に奉存候水府御開運に就ては尙更
氣力を張り可申候此種の人程致しにくきは無御坐候御一笑々々
〇〇へ御傳言忝奉存候此者近來大にくたびれ細も綱も掛け不申甚以

立花登岐筑後柳
川藩の家老にて
先生の門人なり
時に江戸大地震
屋舎崩壊人畜壓
死其數枚擧に逸
あらず是より先
外國の賑答既に
人心に傳せず加
るに此變有り故
に民情愈々た

迷惑に奉存候必竟例之山崎家講義讀之學者にて一切心術之工夫無之
外馳之大病甚敷其故同家中之面々より一統に見限られうち合候者も
無御坐候主人よりも嚴重切確申聞小生も同様最早示教幾度と申限り
無御坐候得共唯屈し込み落入迄に御坐候

梅田は何様氣力にても有之とて一種の人物〇〇か如き者に成りて
はどふもこふも致し方無御坐候扱々迷惑千萬之者に御坐候已上

柳藩立花登岐へ答ふる書(安政二年)

江府大凶變誠に前代未聞之事と申も中々恐に候尊藩之御屋敷大破且
御侍初四人壓死絶言語候御事乍去御類焼は無御坐責而之御事に奉存
候拙藩は上中下之屋敷共に一通りの崩にて家中未々迄死人無御坐候
誠に大幸にて御坐候御許四日以来之御飛脚いまた到着不仕段此許へ
は九日之飛脚來着一と通りは相分り候第一水府別段之大凶戸田藤田
之兩士始士分以上三十餘人之壓死と申事に御坐候誠に沙汰之限何と

り因て壹岐實問
に答る書なり

も言語に述べられ不申候他人は兎もあれ此兩人如此之任合天道如何之
事に候哉扱々痛心之至りに御坐候其外列候方も御三方歟壓死之由例
之本郷丹州同様と承り申候大抵江戸中十の七分大崩にて十の一は焼
申候市中死人六萬計屋敷々々はいまだ相分り不申候左候えは惣計何
れ十萬餘にも至り可申哉古今未曾有の大凶變高論の通り全く神明之
冥罰歟と奉存候扱早速被仰出候筋は御城内要害之場處迄御取繕其外
は其儘にて無構閣置候との事諸家に御使番被差立登城出仕に及不申
其儀御事諸大名在府之御下國被仰出候事此ヶ條九日迄之飛脚に申越
候其後之模様は未だ相分り不申惣して天下之事禍を轉して福と爲し
候は一通り之君相之出來させられ候事にて無之必ず非常卓越之名賢
君相水魚一致の時に被行候ものにて其他の人にては成程大變に當り
ては心動じどふなりと爲んと欲る意念有之候得共元來天下經綸一定
明白の見識無之候故第一等の處に押し出候事は出來不申衆人同しく

見る所枝葉小輔之號令大有爲之機會失ひ果は何之譯にも成り不申依然たる光景に歸し申候古今例明白に有之候此節被仰出候にて考候處諸大名歸國之一條聊英斷の様に聞へ候得共是は明曆大火之節松平伊豆守殿の故轍にて諸公の新案に出候ものにて無之候初發號令如此に候えは中々頼みある勢とも不申扱々遺憾之至に奉存候小生も藤田へは一通遣候心得に御座候處此節之大變にて甚力落し申候藤田を失候ては外に可言人も無御坐候唯々口を鎖申候然る處段々厚き御内存被仰下一々敬服仕候就ては聊恐存之趣下文呈上仕候尙々御存念之筋被仰下候えは重々忝く奉存候

一池邊氏藤田御應接之上水府之誠一所違有之候一條に因て御返書之趣御同意に奉存候然處此一所違と申所全體大違之事にて水府の所謂誠意を内に積と申は恐らく眞之誠意にては無之全く利害之一心と奉存此利害之一心と申は一身之利心を指して申事にては無之事之成否其故事存を見る之利害心にて有之候えは所詮之處は一身之利害にも落申候

を爲し行之上總て表立候筋は嫌ひ必ず密に手を附之事に相成申候此處即ち智術之的而にて隱然たる險阻之模稜天下之人眼識有之ものは既に見破申候當時老公天下大柱石之御身として正大明白之處に御立脚無之却而隱險の智術に御運ひ被成候半實に笑止に奉存候然は此一所の違と申は全鉢心術の大違にて決而天下第一等の事を被成行候御心底とは存し奉らす成否の上より見候半却而小人之邪氣に觸れ事を破に至り可申候是を以成否は天也と御心得被成候は、甚以御了簡違と奉存候惣して正大明白と申も眞偽二つ有て世之所謂慷慨者杯者唯一偏に事を爲さんと欲し無理有理をわきまへずしてひたすら其事を遂げ得んと懸り候は是其人不見識なるのみならず其心術專に功名之上に馳候て義理正大之筋を表に押立候輩にて事こそ替れ戦國山師者共と同様之輩にて今日に於て深く恐るべき事に有之候此種之偽物にこり正大明白之道をいやがり候は必ず水府に限り不申候公に天下老

練之士之通患と奉存候將又水府に於ては舊年之禍亂に御こり被成一
 摺此病深痼いたし深く残念に奉存候
 一老公諸大名を御誘掖無之所御高論御同意に奉存候是則前條心術之
 御曲にて成否利害之上に御心有之候間此一條尤以御憚り被成候只今
 之御心術にては譬諸候に御手を被付候とも極々之穩密にて或御内狀
 御遣し被成候歟又者殿中坏にて隠語等之御咄有之歟の御智術に出申
 候既に此筋の事は二三ヶ條之其證據有之却而人心を御失ひ被成候其
 事又世間に流布いたし候智術之益なきのみならず可恐事如此明白に
 有之候天下之事は幕府に有之幕府之事は老公に有之今日之天下大根
 本之御身にして如此之御心術之曲は誠に頼み無之事に奉存候池邊氏
 之御見識は此御心術を見被申候にては無之歟と奉存候然は如何に列
 侯を都させられ候様に御建白に相成候とも中々御取用に者相成申間
 敷譬御得心候とも御誘掖之筋前條隱密之御手段に出候而正大明白に

水府 奉存候
 林田の紙

押出され候には参り申間敷残念至極此事に奉存候要之水府之君臣人
 傑之天授に候得共如此心術之曲は必竟學問之偏所より出候事にて深
 大切に奉存候是等之愚存も藤田存生に候得はどふそ一度は届度罷在
 候處此節之落命實に力を落申候最早誰に向て心中を盡可申哉誠に寂
 然たる光景に奉存候

一老公此節之御出現に付而池邊氏に御申越條々之内水府之見一所破
 れさる所有之罪を公邊に懸け自分隠然として顯不顯之病御坐候此所
 長大息之御説至極御同意に奉存候先頃も津田山三郎紙面遣し專公邊
 御誠意無之所を嘆息申遣候小生は左様のみ存し不申候勿論諸閣老大
 權を老公に被讓候筋に者勢決而参り不申候其罪有之者申迄も無之候
 然るに老公に於ては御心中を奉察候天下之大權を御一人に御引受被
 成候共天下之急危を御一身にて御救被成度どの御志は恐は薄く可有
 御坐候やはり諸閣老と共に天下之事を御謀被成誰主に成り申もの無

之所に御心有之候と奉存候然る所以前條申候通り利害の御心主に相成候故御一身にて天下之的目に御當り被成候事實に深く御避被成候御心中と奉存候然らば廟堂老公を御專任無之と遺憾は天下有志士之念願にて水府の老練家は却而是を深く恐れ候事情と奉存候池邊氏よりも何共天下に先立候處何歟遠慮有之又は山之絶頂に登り上りも下りも出来不申様之勢と申參り候池邊氏は津田同様やはり罪を廟堂に懸け專に御任用無之其名ありて其實無之虎に騎之勢と見被申候得共是は例之水府之智術にて進退固窮に見を懸け候て天下有志者の責をのかれ申所にして是則心術之曲御誠意之立不申所と奉存候此隱微に至候而者天下之有志者恐らくは見破申間敷水府之術中に落入罷在候は殘念に奉存候

然之道理にして何事に處候而も我か了簡明白に有之聊も疑惑無之筋に候えは我が心も能其事に一途にはまり他念無之候其はまり候心が則誠にて此外に別に誠と申心は無之候水府君臣御身に於ては伊尹之所謂我は天下之先覺なる者也と申御任底之御心他に御讓可被成様は無之候得共必竟御誠意立不申しては天下之經綸綱領條日本末緩急之次第に至る迄分明一定之大聰明無之よりして自然は利害之心に御引落され被成候と奉存候將又此君臣之御令名天下に蕪人才譽望泰山の如く有之御應接被成候えは何も御下風を仰き御一言をも難有奉存候位にて誰ありて一人寸鐵をつき立候者無之より自然御氣高に相成り天下之人才は我一人と君臣共に被思召候は、無餘儀勢とは申なから今日御心術の弊病と相成り御聰明を塞き候筋と奉存候其故天下之人々御求被成候御心は一向に見え不申天下之人才愛せられ候も御使令被成度御心に出申候扱々殘念之至に御坐候

一夷變以來廟堂御所置之失策彼の十三條約定を初として大抵は國躰を辱候事のみ候得共是は泉州伊州初諸當路流家之仕事にて老公被成御坐候得者天下之有志者此公を頼に罷在候故心膽を落候に至り不申今に至り老公御處置天下之人望に叶不申下等之失策に共出候而は最早何之頼も無之必定人心瓦解可任自然之勢にも相成候而は天下の事再ひ爲すへからす甚以憂勞いたし候其故小生はひたすら水府を氣遣ひ笑止にも存候日夜心を苦申候水戸君臣に此一點之赤心は通し申度事に御座候

一今日之廟議高論の通り大節儉之事武備を嚴にする事糧食を貯事此三條に出に相違無之是を以て富國強兵の實政と相心得候は誠に嘆息之至に候全躰天下之事第一等をさし置き二等三等にて行候事は古今其例無之高諭一々敬服仕候誠に此三條を申候えは節儉も武備を嚴にするも糧食を貯るも事は相替り候得共同し筋之仕組にして全く表向

之事に御座候今に列藩君臣依然たる舊面目之人物にして大節儉行れ可申哉武備を嚴にする之實事行れ可申哉糧食之貯行れ可申哉一日百回の號令を被出果は刑罪をいたし被威候とも其君の心も改り不申候其臣之不肖も替り不申候而何之實事歟行れ可申歟徒に責を塞て表向之手數迄相成り候は必然之勢と奉存候將又今日窮乏之列藩にて強て大砲を鑄り軍艦を造又は糧食を貯候得は其勢民に取らざる事能はず忽に民百姓之大害と相成り候は是又必然之勢にて甚可恐事に御座候物して是等之拙議は廟議必竟江戸一府之事に心有之天下列藩に懸りおまねく治平を求むる之心無之故天下之事情を得られざるに出候事にて誠に笑止に奉存候

一列藩君心を御誘掖御感動被成列藩各々其弊政を改君子用ひられ小人斥られ一新改正之治に向候様に御配慮被成候事は今日之第一御急務に候は高諭之通重々御同意に奉存候然る處此外第一之急務有之尤

人材の在る處は
即ち人望の歸す
る處天下の人材
を江戸に集めて
天下の政事を公
張す
共にせんとなす

今日之大切成るは天下之人才を江戸に被召寄候事にて有之候總して天下人々望を懸け重んじ候所は人才之在る處に有之候人才朝廷に有之候得は朝廷重く野に有之候得は野重く江戸に有之候えは江戸重く水府に有之候えは水府重く尊藩に有之候へは尊藩に向望いたし拙藩に有之候えは拙藩に向望致皆其有る處に人心は向望いたし候ものにて是自然之勢にて候然は今日之大急務之御處置天下人才之悉名顯候者總て江戸に被召寄天下之政事當今之急務御誠心を御打明し老公を初諸閣老三奉行に至り候迄貴を忘て御講習被成候えは天下の人言を求め天下之人心を通し天下之利病得失を得候事は此一舉に有之候勿論其人々相互之講習討論は尤盛に行れ面々所見殊候共遂に者一本之大道に歸し可申候是則舜之開四門達四聰之道にして天下之人才と天下之政事を共に致し公平正大此道を天下に明にするは此外に道は無之候勿論一國之執政大身たり共少も無御遠慮被召寄候は當然之御事

五家五冊
一切

にて扱其正義議論は現實に御政事に御施行被成候え者列藩深瘡之俗説弊風自然に氷解いたし正大之風に變化いたし候不日之勢と奉存候是其大略を述候事にて精細の事は略申候
一地震大火に付而御高論中在府大名御歸國并に奥方御女中國に歸され候事一々御同意に御座候
一此機會に因て御旗本之面々江戸二十里限り在宅せしめ江戸へは勤番交代之事
一江戸市中之者江戸生之外總て其國々に歸可申付町奉行より精々吟味之上公領は御代官私領は國主郡主受取て夫々家産に付しむべき事但大丸松坂屋等之諸國之豪商共たな見せ一切停止之事
一御城御女中總數壹萬餘人と承申候古後宮三千と申候得共三倍にも至り弊事之第一にて此節御女中盡く歸家可被仰付是闔門よりして政を一國天下に推及す之第一之御所置にて有之候事

吉田

吉田悌藏は越前藩の教授にて東學を興す最も力有り先生を尊

一大將軍家御城御出に相成何方にても御陣中之御住居御政事被聞召是古人非常之變に所する所謂郊に廬する御處置之事

一諸大名家屋一切破却在府中小屋住居之事

一諸大名以來は一年に百日之在府にて往來は出陣之格にて參勤之事

一大坂を初豪家之輩諸大名之借金十ヶ年疊置候事

右之條々御改正に相成候えは江戸内之人數十之六七は省可申將又天

下列藩無用之費一時に相改り今日之大貧國を變し大富國と相成候は

三年を不待して掌を返すよりも易き事に有之候

十一月三日

吉田悌藏へ答ふる書

一書拜啓仕候

御兩家 上々様益御機嫌能奉恐悅隨而貴家被成御揃御安康奉拜賀

候先以七月十九日御認之御狀遲着仕忝拜見仕候被仰下候次第御厚情

信す此書は安政二年大地震後之來信に回答せしなり

之至 小生よりは誠に法外之御不沙汰に罷過幾重にも御海容之程奉希

候如高論天下之大勢變動いたし行末之勢も最早前知致され何れ高枕

仕事に奉存候扱他はさし置鈴木君御不幸先達而柳川より申來誠に驚

愕之至絶言語申候既に一書を呈し御吊詞可申上心得に罷在候處此節

之御書狀にて細々之御模様承り本多淺井兩君を始連々之御不幸何と

も可申上次第無御座候御一藩之御運のみならず實に天下に關係いた

し申候賢兄御心中奉察入候將又水府二田失亡無是非至にて角有名之

面々不幸も天運共にても御坐候らはん心細き事に御座候藤田へは段

々意見申遣候筈にて既に草稿相認罷在候中凶變相聞別而殘念に奉存

候二田失亡いたし候ては水府に申遣候相手無御座意見狀も其儘にて

封し置申候來春にも相成候えは清書等も仕り御手許へ差出思召も承

り可申候尊藩建學世上に專御盛事を唱候事と相聞追々仰山に承り聊

不審に存居候處此般之御書狀にて何も安着仕候村田君より被仰越

君上御會業等御相手に御出被成候段誠に大慶千萬に奉存候
君上御見識彌益御長進被遊候と奉存上候恐多申上事に候え共兎角三
代之象を御養ひ遊すては後世之學に落候間書經杯は御平常被遊御精
讀自然に堯舜之氣象御うつり被成度御事に奉存上候三代以下之氣象
にては決而天下之治化は出來不申此處に於ては尤以御大切に奉存候
尊藩御同社中來春にも至り九州筋長崎表等之事情御見聞として御出
し方は被爲出來間敷哉左候えは拙藩にも誓御到留近年聊存し付候筋
等御咄合申度願望に御坐候心緒萬端書中に付盡し得不申先奉報迄仕
餘は春風寛々可申上候以上

十二月廿一日

横井平四郎

吉田 悌藏 様

猶々時節御自愛被成度奉存候 小生 轉居被仰下忝奉存候一昨秋家兄
病死甥共弱年にて不得止家督相續仕候近年種々之病災等にて家事

甚不如意罷成城東二里之地沼山津と申所に轉居仕候其後一男兒を
得悦ひ罷在候内去冬夭亡引續十日餘にして妻死去誠無類之不幸御
憐察可被下候沼山津は山水之佳勝地にて塵俗之累も無御座日夜同
社と講學迄に罷過申候尊藩之御事は日として御噂不申は無御座候
二三輩は聊進候者も有之樂申候前條御同社九州御出方は吳々御配
意被成度左候えは極而博文之御一助と奉存候別而 小生 一社御待申
候事に御座候

別紙

御大人様去十一月五日御遠行被成候段誠に以驚入候御事奉存候於賢
丈も先年御子息様御失ひ被成此節之御不幸連々之御事にて御心中奉
察候
御老母様御病後彌益御壯健に可被成御座候恐母年明候えは七十に罷
成り近年色々病氣打重り餘程弱り候えとも兎や角と仕り罷在申候知

命之年に至り老親御座候は誠に仕合にて來春は賀祝仕筈に御座候間
御間暇之折御高吟被成下度重々奉願候以上

十二月廿一日

横

井

吉田様

柳藩立花壹岐へ答ふる書

一昔拜呈仕候時下愈御安泰被成御勤奉拜賀候先以舊臘は御書狀被成
下辱く拜見仕候縷々被仰下候趣御厚情之至深辱く奉存候尙御再勤被
仰蒙重々恐悅拜祝仕候攝州君も御様子承り御同様の旨於小倉江口純
三郎列毎々得拜顔委細御様子承り近日歸郷夫々傳承仕候當節柄別而
御大事にて彌以御自愛專一に奉祈候物而治國之本者自修に有之は古
今之言にて三尺之童子も知たる言に候え共古今有志者坐論に落入其
實行無之より亂日のみにて治日絶果申候此自脩者形跡之事にて者無
御座眞實に私情智術をさり本來之真心を推及する事にて誠心確立政

幕府初度長州藩
征伐同藩伏罪後
の頃の書なり

恩威の眞義を辨
す

〇

事之根本と相成信義上下に貫徹し恩威二ツなから行はれ申候恩威と
いへ者賞罰之様に心得候えとも左様にては無御座候恩は人の善を舉
用ゆる事なり威は我明之人心に徹するなり人之善ある己有之如く眞
に好て舉用ゆる故恩一國に行はる我明眞に事情に達し百之有司欺こ
と不能故に威一國に行はる是恩威之二ツなから行はるは我一身の
誠に有之發して賞罰となる抑その末にあらざらん哉然るに智術に發
して人之善を取は私恩を賣なり察を以明とするは私威を立るなり此
際分毫にして千里之隔となる深く戒めすんはあるへからす平生之厚
誼老婆之一言拜呈仕候
一別冊三條之御高論一々敬服仕候方今之國是此外に有之間敷候唯可
恐者自然之天理一切消亡致し人々各私心を以意見を立互に敵仇相成
し候得者遂に
皇國を亡に至り可申候近來之京報定而御承知と奉存候京師關東兩立

之勢其間是非之可議は可有御座候えども要之共に私之爭論にて實に歎息仕候其他列藩何方も私論のみにて公共之天理絶て承り不申扱々聞夜と相成いつ明るへき世の中や不可知君子此間に在る彌増誠心を磨き天理を明にし爲百世斯道を立候志第一義と奉存候如何々々拜復早々可仕處眼病相煩引續齒痛老病種々差起り心ならず延引奉恐入候山海之御咄申度候え共書狀に盡し得不申先此段拜呈仕候頓首拜

三月朔日

尙々攝州君池邊君初可然御致聲奉頼候老生も無事に閑居罷在御安心可被下候御高吟幾回閑吟仕候以上

下津休也外二名へ與ふる書(安政五年)

一書奉呈仕候時候愈御安康に被成御座珍重之御事に奉存候隨而小生相替り不申壯健に罷在申候間御懸念被下間敷候然者江府之事情先便呈上仕候通りに御坐候處先月廿二日飛脚到來情勢殊之外打替り候必

先生此年始て越前に聘せられ同藩在留中の書なり時に江戸將軍繼嗣の紛議有り非伊大老政を執

る春岳侯及其他有志の諸公未だ慕の體費を受けざる前なり

竟西城一件各々希望有之櫻開京師入洛大失計にて其留守上田閣驪案南紀を主張被致彦根同道より御側宮中下地總て幼君を利し英主を忌候處にて大躰一統一橋公へ恐れ南紀を立る勢に相成り櫻閣歸府之後者先如何とも不可爲事情に御坐候依之流俗又々勢を得朋黨之名目を唱へ有志者渾て一網に被打込申候勿論只今起り候ものにては無之下た地久敷隠伏之病症陽發致し其根本は水老に關係いたし御案内之高松杯大に取り持當年御滯府扱々遺憾之至に御坐候乍去最早七を抛候容躰と難申候え共先は極々難事之勢御推量可被成候水府大風波先者破亡之極と可申候全躰老公先書にも得貴意候大偏執之上近年者御肝氣甚敷何も無理之理究迄にて有之是迄順從之君子黨と被稱候内兩端に相分れども老公にて者國は治り不申且又天下之禍を被成候と申處に心付段々異論相立候處一切御取り用無之のみならず大に憤怒に相成り候より此面々當中納言公へかた持致し御父子

百五十四
各々黨派相立内輪大惑亂に御坐候處一橋公 西城御入之勢にて双方
勢を見罷在候然る處此事六ヶ敷相成り候間忽に火事打揚げどふこふ
も致し方無之容躰依之是を被押込候好黨之面々當公方に相成り總て
一致之色を露し老公方者至而僅少にて又々老公へ押込候手段十分に
手を廻し申候退々御咄合申候通り總て老公之無理にて國家を覆亡被
成候者全く學術之曲に因り候事にて深可恐事此許にて夫のみ講習
仕候右之通り之事に因て天下知名者水府推尊之心者次第に消亡致し
氣の毒に御坐候此許之事情は定而安場より萩君御承知と奉存候其後
相替り不申候一統人心漸々居り合候勢に御坐候近日重役兩三人歸國
之筈にて御家老以下何も相待講習仕筈に御坐候是等會心一致之上者
先者上下異論無之扱君公にも江戸之摸様により候而者當秋御歸國に
も相成可申夫のみ何も奉待候惣して事に懸り候事は如何にも押延し
來年にも又來年にも少も苦しからず君臣上下大道明に情意相通し一

致いたし候根本尤以肝要にて其上人情を察し自然之理に順ひ事を爲
し候えは何も風波も無之すらりと被行候は必然之事に御坐候是等之
條理は大分明り申候間四五輩之人物者出類之人も出來仕候必竟是迄
か水府の餘毒にて例之文武節儉之押懸け大に人心を失ひ居候處當路
之面々實は致し方無之折柄に而拙議も無異義被行候ものに御座候扱
も水毒者恐敷事と奉存候種々様々言上之筋御座候得共何もさし置前
條光景打替り候迄拜呈仕候以上

六月十八日認

横井平四郎

下津休 也 様

萩 角兵衛 様

元田傳之丞 様

尙々諸賢御自愛可被成候休也様御病氣如何案申候時節隨分御愛養被
成度奉存候御地氣候如何に候哉此許梅雨今以霽れ不申氣候殊之外不

順昨日杯は一と重に羽織を懸け候位今日は又帷子箇様之變化甚以恐
申候江戸上方共に殊之外雨勝又不順之由九州筋如何と案申候元田君
御舊作御草稿此許にて段々拜見いたし度申出候面々有之乍御面倒御
認め御送り被下候様吳々奉頼候何分御急き之方奉待候已上

越藩村田己三郎へ與ふる書(安政三年)

一書拜呈仕候先以 御兩家上々様益御機嫌能被遊御座奉恐悅候隨而
賢契愈御安康に被成御入珍重之至に奉存候然者七月十五日御認之御
狀當月に至り到着仕忝く拜見仕候縷々被仰越候趣忝く小生より久々
寸紙も拜呈不仕御無禮御海容可被下候

天下之形勢一變いたし東地震動水滸二田失亡彼是御慨嘆之段誠に御
同情に奉存候夷變以來は別而心を潜め天地之情勢を默觀仕候え者三
百年にも及候太平之人情一旦義氣に發し兵亂と相成候は決して無之
事にて必ず苟安姑息無事太平に歸し候は自然之勢とも可申哉今日と

安政三年の昔な
り此時先生既に
西洋の事情概略
を得たり然れど
も未だ其詳細を
得るに由しな
故に其政治宗教
の關係及魯西亞
の關係等を論ず
る所或は異同有
る所以なり

相成り候ては更に前日之所置を以て議すへき事とも存不申今日は又
今日之所置大に有之事に奉存候扱其所置に於ては深く三代之道に達
し明に今日之事情に通し綱領條目巨細分明之大經綸有之大有識之君
相にてましませすしていかて此落日を挽回し玉ふへきや和漢にて明
君賢相と稱候位之人にては中興之治は出來申間敷時運かと存候え者
遺憾無限奉存候

尊藩建學之御事被仰下御事情い細承り御尤に奉存候如命今日に當り
て尤以第一義と奉存候は此道之講明に有之所願は上下人心此道を信
し他岐旁蹊に迷ひ不申愚夫愚婦之佛を信じ候程に相成候えは萬弊萬
害愛に不足事に奉存候然處我皇國是迄大道之教拂地無之一國三教之
形御坐候え共聖人之道は例之學者之弄ひものと相成神道は全く荒唐
無經些之條理無之佛は愚夫愚婦を欺のみにして其實は一國を舉全無
宗旨之國牀に候え者何を以て人心を一致せしめ治教を施し申哉方今

第一義之可愛所は萬弊萬害何も扱置此處にて可有之候惣して西洋諸國之事情彼是に付て及吟味候え者彼に天主教なるもの本より巨細之筋は知れ不申候え共我天文之頃渡候吉利支丹とは雲泥之相違にて其宗意たる天意に本き舜倫を主とし扱教法を戒律といたし候上は國主より下庶人に至る迄眞實に其戒律を保持いたし政教一途に行候教法と相聞申候大抵其宗の法則は經義を講明するを第一とし其國之法律を明辨し其國之古今之事歴より天下國家之事情物産を究天文地理航海之術及海陸之戰法器械之得失を講究し天地間之識を集合するを以て學術といたし候由魯西亞國を以て申候え者比達王中興より當時迄殆三百年餘に至り其邦内政令能行治平相續き國王年中之三之二は邦内を巡見し民間之利害政事之得失を察し供人僅に八十人に不過別段に行在所と申もの無之行懸りに客舎或は民屋に止宿いたし至て手輕事と承申候其學校之法は一村の童男女より教を入其内に俊秀を一郷

之學に舉其より一郡其より一部々々よりセントペートルスホルグ之都城之大學校に入候由當時學校生員一萬に餘り政事何そ變動之事總て學校に下し衆論一決之上にあらされは決して國王政官之所存にて行候義は相成不申將又執政大臣等要路之役人は又一國之公論にて黜陟いたし候由是等之事總て其宗旨之戒律之第一義と承申候將又民に取之年貢は十之一分にて有之此外は聊も取り不申其故民間殷富いたし經濟之道は第一土地を堀出する金銀銅鐵等之諸物將又工職を集工作場を立其地々々産物にて諸物を造り是以天下に交易致し是等之利を以て國用に致し申候是を要するに其政事全其教法に本き來り候故上下人心趣向一致致し邦内を舉異論無之由に承申候是等之政事西洋諸國小異は有之候え共大抵皆同じ筋に相聞魯西亞に次てアメリカ新造之國にて別而盛大之由に承り申候近代歐洲之海國國志ありりか之部は其國志に因て著し候間餘程明白に有之候え共魯西亞杯は殊の外大畧に魯西亞漢士に通し候は康熙以前より之

事に候え共夫迄は陸路之通信迄にて海路未だ開け不申候故アシヤ洲
中二宗旨有之聖人之道佛氏之道と申迄にて未だ其道之全躰は承知い
たし不申我寛政之頃より海路開漢土天竺杯に使節を遣し國幹事情を
察し先天竺に學生を遣し數年留在せしめ其地之學問政事之情實を見
申候處當時天竺ハモゴル一統政事衰廢致し一として見る所無之將又
佛氏之學を研究致候えは其宗旨些之條理無之誠に荒唐無經にして一
切人道に關係致し不申甚以驚駭いたし如此之宗旨にては其政事之道
なきは當然と存候由隨而漢土へ遊學に遣し燕京に留在委細國躰を見
申處其折柄乾隆之末年にて是又政道衰運に傾進士及第杯も賄賂を以
て擧候位にて其政事之無道を驚申候又學者之所學は經書を見文詩を
作候迄にて其道たる何の趣意たる事不相知聖人之道とは箇様之筋に
て候哉全佛氏之道と人道に關係不致候は聊も相違無之アシヤ二宗旨
愚昧之甚しき其故其國總て政道を失ひ世々内亂止不申追々他國より

取られ候も必竟人道之明なり不申故に而深く痛心に存候内其後尙又
燕京に遊學に遣し距今三十五六年前後の由此度は專聖經を研究致し書經詩經論
語之三部を其國之文字に翻譯致し國都に持歸其大學校之詮議に懸け
候處第一規模之廣大なる經綸に明齊なる修己治人政教一致なる所に
深く驚核致し三千年之古如此之道明なる堯舜之聖德に於ては誠に奇
異の思をなし其奉る所之天主教之教と全く符節を合候と論決致候處
後世之漢人如何成故に如此之大道之本意を誤り唯々書を讀み文詩を
作候を學問と心得候哉後世道衰廢人道亂るゝは全堯舜孔子之大道を
失ひ候に有之候えは當今漢人深く此處を省察致し無用之文學を相止
三代の大道再ひ其土に明なるに於ては其國之中興掌を返すか如し若
又此道を明にすると不能して其智に任して國を治めんと欲せば是獸
を海に獵し魚を山に漁に同じ何其愚昧之甚しきやと右之經書を開板
し此趣向之序を致し漢土に送申候處林則徐杯取り傳深感嘆致し候由

右之序中我聖人之道と彼か天主教と符節を合すると申候え共此には大に論する旨も候え共此節はさし置先彼等か道は一國無貴賤一統其道を奉し實地に行宗門を以て治道と成し二に分れ不申候えは彼より日本漢土杯見候ては序中に申候通り實に道なき國躰に相違無之於是深可愛之第一は西洋通信次第に盛に相成諸夷陸續入り來り候えは彼等教法政事自然に明に相知れ候に就ては我邦人之中聰明奇傑之人物是迄聖人之大道を知り不申者彼我政道之得失盛衰之現實を見候而者不知不覺邪教に落入候は十年廿年之間には鏡に懸て見るか如し佐久間修理杯は既に邪教に落入たるにて相分り申候ては無之候へ共政事法一切西洋之道明なり是唱聖人之道は獨り易の一部分の總て事之善惡共にみ道理あると云ふ承る是彼邪教に落たる之實境なり世に行るは必ず人傑之唱へ立る故にて候え者三代之道に明ならず三代治道に熟せざる人は必ず西洋に流溺するは必然之勢にて候へは今日之大に憂所は何も扱置此道之外は無御坐事に奉存候扱又此道に付

池邊は先生の門に在る最も久し柳川藩の先生を信奉する此人の力多きに居る此書は越前春岳侯と欲し先づ其村田氏を請へし内諭を傳へしむ時に池邊も亦其事を賛成せんさ欲し同く沼山に來る君命を達て後村田は薩州に行き歸路柳川に過るとを約す故に此書有り

而者此四五ヶ年來は聊講明仕候筋も御坐候へ共此度は何もさし置申候定而新得之御發明可有御坐後便拜聞仕度奉存候此段迄拜復仕候

十二月廿一日

柳藩池邊藤左衛門へ與ふる書(安政四年)

一書拜呈仕候先以頃日者御來臨被成下久振に拜話を得大慶至極に奉存候御歸り御氣削被成と奉存候扱彼一條種々思量仕候處さして異存も無御座候御咄合通りに先安着仕候村田歸り候へ者定て江戸之様に參り候事に被存候左候へ者直様御懸合にも可相成哉又は秋にも至り可申哉夫はとふとも支へ不申唯御懸合之仕方方家老に直に被仰聞候者餘りをつこふ歟と被存先越之御家老より此方家老に直に懸合相談いたし候義當然と奉存候扱又越前守様より寡君に御直書に而被仰越候事可宜奉存候左候へ者家老より御直書并に越前御家老懸合之趣申遣し熊本に而詮議相成候筋に參り可申其先きは又其先之活法にて

先右之通之御懸合當然と奉存候村田歸りに罷出可申候間此段得斗御咄合被成度奉存候
 一梁川星巖事村田に咄合仕候是は今日之事に而無御座候後日成行出來候上之事に御座候村田も其了簡に而可有御座候
 越公天下に御懸りは世子之事も何も歟も先一切御見合被成度御事に奉存候第一越公十分に御見識相立天下第一等之御身と御成り被成不申ては何事も無用に相成却而弊害を引き起し可申今日之處御一己御修養のみに而其外者總て御さしやめ何事も御手を被出候儀御無用に奉存候越公果して御聰明御開被成候上者尾藩之君臣御開被成尾越二藩真に此道明に相成候へは水老を御開導被成三藩大道明に相成不申ては天下之事は決而行れ申間敷一ト通り之御明君位之御身にては三藩御合休は必定六ヶ敷御座候左候へ者世子之御事も何も歟も御さしやめ御一己御修養之外無御座と奉存候此段村田に御咄合被成度奉存

候御歸り後種々思量拜話山海に御座候へ共何も扱置此段迄得貴意申村田に宜く御傳可被下候已上

五月廿五日

越藩橋本左内へ與ふる書(安政五年)

一書拜呈仕候

御兩家 上々様益御機嫌能奉恐悅候隨而 賢兄愈御安康被成御勤

珍重之至に奉祝候然者去る廿五日之御飛脚に而被仰越候次第夫々傳

承仕萬端御心配之程奉察入候

一墨國定約列侯方御違議無御座大略相決候段恐悅に奉存候

一一橋公御事大に案勞仕候

國母君には大に邪氣入り居候事に被考然る處今日に至り此 御方に御手を被附候儀は却而失計に相成可申其外宮中同様一切かまひ不申廟堂迄に而一日も早大計相決度不然しては後禍甚以可恐事に奉存候

橋本は春岳侯に
 近侍し天下の事
 に盛力せし人な
 り時一橋公を推
 公して將軍の繼
 承を以て一大紛
 争を生ずる先
 戸に贈る所なり

或は
 大樹公御母子之御間に疑惑も可有御座哉今日之大事に至り聊もさし
 支之御事とは不奉存候賢慮如何と奉存候
 一彦根大老諸執事も承知無之由定而閣老之立物と奉存候夫切に而候
 へは責而宜敷萬一邪氣有之水府杯を防之筋にも出候儀に候へは例之
 朋黨に而後來之禍本と奉存候高松杯之事情如何に候哉無心許奉存候
 一水府公御事 一橋公御得心被成候段定而最早御開悟に相成候事
 に奉存候此 公沈痼之御病にて一旦には氷解任申間敷然し是非共御
 底心より御了解被成候迄参り不申而は何歟に付き御障り可被成候
 越前守様最早御對顔被遊候歟と奉存候何分御了解之處奉祈候
 本多君村田君御到着に而御集會想像仕候兩君に呈書不仕可然御傳致
 奉希候此段畧呈餘は後雁に可申上候以上

五月八日

前年春岳侯罪を
 幕府に獲て後國
 を繼嗣に獲て後
 る侯能く春岳
 侯の志を繼紹し
 精を勵して治を
 求む執政諸有司
 愈奮興す此に至
 りて始めて政事
 に着手す蓋し先
 生の経綸順序の
 次第を見り可き
 一端なり
 一書中は春岳侯
 あり

荻角兵衛元田傳之允に與ふる書

新春之御慶目出度申納候御兩家被成御揃念御安康被成御加齡珍重之
 至に奉存候 小拙も相替不申無事に加年仕御休神可被下候御許 新
 君初御入部當春の風光如何哉と想像仕候此許 君公初執政諸有司總
 て一致いたし初て國是と云もの相立申小生罷越てより年は四年に至
 り去初冬迄は人心各々に分派いたし陰嶮智術に落入候を主として心
 配致し候處當夏以來漸々開明各心術之上に心を盡し候勢にて遂に十
 月十五日大議論と相成り十分之地位に押つめ候處此次第は筆に畫夜
 の如く相替り執政初盡く落涙にむせひ十分之開明と相成申候直様執
 政一人目付一人江戸出府中將公に積年以來君臣否塞之次第言上に及
 臣は君に御斷を申上君は臣に過を謝せられ自然に良心之禮讓感發致
 し靄然たる春風窮陰積雪之中に發動致し去月廿五日兩人歸國致し候
 此事情自然と國中に風動致し彼之俗論杯も何となく消融致し候扱又

國是三論出來一は富國一は強兵一は士道此三論を以て一國を經綸す
 る士臺に立其根本は堯舜精一之心術を磨き聊の私心も無之所之修養
 第一にて決して秦漢以後之私心に落さず三代秦漢之論は追々御互に及
 工夫に至り發明之日夜講明此事に御坐候扱舊冬は御家中御借米是は百
 事も様々有之候御不如先一ヶ年の處御返しに相成る此一事に因て御家中
 意にて御借米なり案外の仁恵と成り上下一統誠に難有奉存候扱一統之勢角迄御仁恵被
 下候て町人百姓の難澁となり候ては不相濟と申心得より町在之借金
 或はかい懸り等可成丈拂方いたし候間其仁恵は下々の温澤と相成町
 在の悦ひ不大方扱又町左へ者至窮民救卹は勿論第一問屋と云役所を
 建何品によらず民間職業之物をかひ上る其役人は官府にては町奉行
 勘定奉行郡奉行製産方當時専ら豪家の者に申附當時拾人追増員之密此本しめ
 役之下に町在にて可然人物を撰ひて五十人斗を付て領内を打廻り職
 業の品を買ひ或は其本入等の世話致さしむ尤買入候者諸方にてさば

り

き候と大切に是又右の役人より國々にも出して取計ふ事也大抵の
 究めを申候へは斯の通にて内輪様々は筆上に盡されず候問屋出來に
 因て市在一統甚敷はげみ立年の明暮扱は莫大にもち懸候て勢甚よろ
 しく御座候右の本じめ扱は日夜に出勤官府役人と討論講習總て民間
 立行之事のみにて我家之事は何も忘却致し候勢に相成候必竟人心之
 向背上之心の公私に有之是迄は天下列藩總て政事は官府四五人にて
 取計ひ聊衆言を取用さるより下情も暗きのみならず先我私心にて一
 切下情を拒絶致し候故誠に無理不都合なる政事之押方のみ相成決
 して治平を爲し得ざる所以なり是天下鎖國之私見誠に道を知らざる
 の甚しと云ふべし然處此問屋一條にて上下一致に相成初て上之仁心
 下に通し下の良心上に通し是迄聚斂等舊習も一時消融致し只々上よ
 りは下之富を樂み下の貧を憂る元來之心と相成候て下是迄疑惑不信
 之心解候て上を信する本心と相成候元より此一事にて政事相濟む事

にて勿論無之是より郡政を初家中之仕置強兵之手段等漸々相立候事
に有之候乍然是等政事も末之事にて其根本は初にも申通り此學の一
字三代以上の心取第一之事にて是又申に不及候此三代之心取と秦漢
以來之心取は事功に應ずる心性情より發すると發せざるとの二の間
にて譬は賈誼杯の如き人材と云はれ候者の心吳楚七國を削り或は匈
奴を亡さんと打立心の起は只に時之弊を見て思ひ立ものにて吳楚七
國は文帝之兄弟叔姪之骨肉たるを少も氣の付ぬは餘りなる不仁不義
の心ならずや是を以て後世人才の心術の違押て知るべし決して家國
之治まらぬ心底なり總して弊と云は大抵法度政令には無之事にて上
之心之私が忽に下心を塞候ものにて法度政令如何に宜しき筋之事も
下より用ひざる様に相成候是則弊にて上之私にて有之候然は秦漢之
際より一步も下る事は不相成候孔子は堯舜を祖述文武を建章し天地
之時に隨ひ被成候孟子も孔子に私淑し孔子之學ひ給ふ事を學はれ候

程朱も同斷然るに孔孟程朱を學と云へは孔孟程朱の言行之跡をまら
へて是が道の是が學のと心得たるは孔孟程朱の奴隸と云ものにて唐
も日本も同一般之學者之痼疾にて遂に一人の真才無之所以悲むべき
事ならずや小拙平生學ふ處信する所此藩にて聊行ひ候次第前條之通
にて三年の今日に至り此道聊一藩に行れ候事に相成彌益此學之真切
なる堯舜之盛大なる通天地之間此道を知らざるは決して家國を治る
不能之實證を合點仕候如何御了會に候や承度候
扱又私事中將様是非御逢被成度思召候て去月初に江戸へ出府之儀龍
口に御頼入に相成近々熊本に申越に相成候間熊本御差支無之候半ば
出府致し吳侯様懇々之御頼有之候御承知之通り最早知命も三ッ過ぎ
殊に去秋大病相煩以後本復に至不申此許晝夜多用心配致し實に幾段
歎老衰に落入尙又出府と申ては甚以困窮千萬に御座候へ共致方無之
事に相成熊本 思召も無御座候へは一と先出府早々切揚げ引返し申

文久二年春岳侯
幕府懲裁職の命
を受け直ちに先
生を江戸に聘す
至り既に幕府不
臣借越の罪を悔
改し京師尊奉の
實を盡くし而し
て百事の改正有
らしめんと欲せ
し時の書なり

度然し夫に成候へはとふしても秋末に至り歸郷可仕扱々心痛之至に
御座候先此段拜呈餘は付後雁申候以上

正月四日

嘉悦市之進(今の嘉悦氏房なり)へ與ふる書

一書拜呈仕候時下御全家愈御安康珍重に奉存候隨而老拙相替り不申
候御安心可被下候大病後近來漸甘快に趣扱々危き命を續き申候先便
には御書狀被成下忝く御奉職即日何角御多用と奉存候此許種々様々
變動不一日夜苦心御察可被下候必竟は
廟堂俗論否塞第一京師御尊奉一條誠に六ヶ敷近日に敕使も參向相迫
り大混亂に御坐候然し是は大抵是迄之格式も改り候方に落着之御内
情に候得共二百年來 京師を押付け之大弊病此節一時に御改正に
相成候勢十分六ヶ敷是は必竟氣習病根にて所謂不知不覺之私に候え
は尤以改正之大難事に候然し此大難事改り不申候ては京師御尊奉之

ノ書王

實地相立不申候えは決而

公武御一致は出來不申候今日之勢に至り候ては京師は御憤興幕府は
衰弊東西之勢如此之盛衰に相成候えは賴朝公以前の君臣に復し不申
ては 天命人心之正理に背き日本全國大亂之外は無御座候夫故今日
に至り候ては何も扱置き君臣の大禮を被正十分是迄の非禮を御斷京
師御尊奉之實地相立候事は第一之事にて此事因循不改候ては何事も
行れ不申候忽天下之大亂にて御座候右之次第にて越藩にて御奉職之
初第一に被仰上候筋は幕府是迄の私を御去り天下公共之正理に御順
ひ被成候様其實は京師御尊奉第一にて一切是迄之御仕來り御改正君
臣之大義を御立被成候事に有之此大義相立候えは其外は皆枝葉之末
々必ず漸々被行可申候尤形跡にて無之御實心之御改正重々大切之御
事此一條始終御申立にて今日に至り形跡之上はとふなりこふなり參
り可申候え共廟堂一致之御實心之處甚以痛心之至に御座候中將君に

も近日引入に相成申候も此一條にて有之候いまた御登城之儀は見え不申候右之通りにて長州土州會津杯は能々情實相通し何の申談しも出來候え共却て廟堂六ヶ敷迷惑千萬に御座候其外之事様々に候え共一々不及呈達候何れに勅使近日御參向之上又々變動いたし可申候其上にて得貴意可申候先此段拜呈御社中へも御内達可被下候以上

十月廿三日

牛右衛門に寄する書(文久三年)

十五日之御狀相達忝く拜見仕候愈御安康に被成御勤珍重之至に奉存候被仰下候趣御厚情之御事共且今暫は御出府も難被出來次第委細に拜承仕り候 小弟も到着以來誠に寸暇無御座何角之用事に取られ外出も六ヶ敷龍ノ口に一度淺草邊迄晝後閑歩致し候迄にて何方へも参り不申當方之次第は福井表も至極好都合上下一統一致國是も相立何の異議も無御座候中將様へは日夜罷出様々御咄合の中尤も學術之要

先生在府中
の書
なり右衛門
の肥後
先生同姓に
なり同姓に
て門人なり
藩より浦賀
藩より浦賀
地に勤番せ
時水戸藩に
混亂に際し
煩る

人心を動搖せり
又藩士多く外國
の事情に憚動も
すれば疎暴の弊
に至らんまする
の患あり故に書
中懇々之れを解
示す

領至極に御了會被成御父子様并に執政御一坐之御咄合も既に及四度毎に九ツ頃より暮に入り父子君臣誠に家人之寄合之如に有之面白き成り行に御座候 小拙へは餘り御手厚き御あひしらい御父子様共に次之間迄御送迎且痛足之事も御承知にて齒を敷き候様被仰付一重に御斷に及候えども御聞入に相成不申御自身様御立被成候間致方無御座其通りに致し候誠に心痛之事共に御座候右之通りにて餘事は何も御承知可被成候

水浪人之事内輪の事情を承り候處亡命集散の者共は様々のあふれ者にて從來思ひ込候者御家中にて八十人餘も有之是等は亡命致し不申勅書返納之事并に外國之事等先老公思召之通りに行れず幕庭之御所業日本之大耻辱にも至り候節は大事を起し候覺悟に罷在申候中納言殿へは殊之外御心痛實に被致様も無之より武田伊賀^{是は先年隠居}御召出し^{御家老再勤之}諸事御家老同様に被仰付此伊賀は初より何の黨と

用
の

申にては無之何方へも受能き上最早六十餘に相成候て物馴候故伊賀種々に心配天狗黨之者共に及相談萬一日本之耻辱に至り候節は伊賀初大事を起し可申候に付今は十分鎮靜致し候様且亡命の者も立歸り候えは以前の通り被召仕べき段も達此等之次第は水府切りの事にては無之内實は幕庭より御内殿相に及ひ談も有右之通りにて亡命者も退散漸々歸家致し且八十人之者共も落付候て鎮靜に相成候幕庭にては外國も何も扱置き水浪一事に心魂を被惱候處右之通りに相成大に安心の躰あり何れ警戒も不遠解け可申候尤も勅書返納も夫切にて泣寝入りと相成櫻田殘黨御仕置も何れ此儘にて押送り候事と被存候外國之事内實承り候處ハルリス格別に心配誠に厚きとも何とも云はれ不申流石にアメリカ之國躰感心之至りに候通辨官被殺候後之所置は定而御承知と奉存候是等誠に意外之次第に御座候凡通信交易之列國是迄既に七國に及日本二千年來之鎖國一旦に開通と相成候はては

0

迎も内輪政事の一旦に改り候筋合には參り不申政事は矢張鎖國の無理にて萬國と開港致し候ては諸物價騰沸は勿論萬事の困窮に相成候事情得斗熟知致し廟堂に申出廟堂より困窮之情實被打明無餘義次第を以て七國之外交易御斷に相成度付ハルリスより列國に申述取り計らひ吳侯様御都合可被成左候えは直様可然申談じ可申段内談致候に付幕庭も至極御聞取り右之事情書もハルリス内輪に相認め夫を以て英のミニストルに及相談候處是又至極尤と同意にて外に五ヶ國に申談七ヶ國より餘國に箇様之事情無餘義次第に付日本政躰改り人心落合候迄は餘國交易相斷との請合に相成候間幕庭にても至極大悅之趣に有之候漢土は是迄通信無之候を共隣國と云ひ番來恩義も有之國柄故今般西洋同盟諸國へ使節被差立候前に先漢土に通信の使節被遣候儀可然との内談にて有之尤左様に決定候えは英のミニストル取計可申筋に御

座候

右等の次第且は御音信物のととのへ方又は使節仕舞等迎も秋迄に用意出来不申候何れ來春に可相成尤も此節は七ヶ國打廻り候事にて三ヶ年懸り可申との内議に御座候

廣東港に交易として幕府官船被差立候筈然し是は内々之取組にて後日開船之手初之積に有之候此以前英佛より對州開港を願ひ候えども御斷に相成候此節魯使同様申出御斷次第第六ヶ敷成り行候對州にて承允致し不申 欠字アリ

魯使歸帆 欠字アリ

餘程六ヶ敷可相成候右に付て英佛は對州は差置き中國四國之内海にて可然港を借り受申度との事にて既に二國より内海に乗り入り所々開港場等測量等致し候事魯英遂に不兩立之勢深く可憂々々此亂起り候えは日本海岸共に戦争の巷と可相成ハルリスも甚氣遣に罷在候由然し只今之事とは決して見え不申何れ後日之大患此事に有之候

今日の情實列國何れも日本を憎惡之心底は聊も無之只々憐愛を加へ候事にて英佛も疎忽之情は決して無之候るぞ地にて金銀銅等掘出し打立にてアメリカに石工兩人御贖に相成不遠参り候筈シイホルト出府是は内情は同人より昔年罪を得候事深く心外に存候此節は長々日本に居住致し度醫道物産之學并に西洋發明之事等教導致し度段願出候に付江戸に被召寄候當時横濱に居住番書調所之指南方役之中より先三人爲修行に同人手許に被遣候右三人之内に此方様御醫者市川齊と申す者被選参候筈外に坪井信長と申醫者番書調所之懸り役被命有是西洋之事情は随分明白に相聞候

先右之次第第一と通り拜呈仕候水府之事情委細之内情は近日委しく相分り候筈に有之此段拜呈申縮候

四月十九日

牛右衛門様

平 四 郎

在越前の書なり
是れより先き春
獄候既に幕府惣
裁職を辭し竟に
越前に歸る先生
も亦越前に留る
時に幕府日に衰
頹し爲す可らさ
るの勢なり而し
て銀價の騰愈勢
船を加ふ形勢方
に急迫なり是時

尙々此許今暫くも致し聊閑を得候えは中將様より被仰聞候趣も有之
横濱表に参り候筈に御座候其節は御許にも参上可仕何れ來月末にも
可相成と奉存候何分不遠得拜顔萬縷可申上候

在熊本の社中に與ふる書(文久三年)

五月十一日御仕出之御狀同廿一日に到着忝く拜見仕候先々諸君御揃
愈御安康珍重之至りに奉存候然れば左平太兄弟歸郷尙又罷越の儀は
一統之論説有之微行六ヶ敷次第等被仰越就ては段々御心配被成下厚
意之御取計一々御尤にて聊遺憾無御座候左平太兄弟昨今罷越候には
及び不申爾後之都合宜敷節に参り候様に奉存候必竟は兄弟共に小拙
變難より稽古等も出來兼候のみならず御許に罷在候ては様々の悪評
等唯々心痛のみならず誠に困究至極と存じ候此許にては航海を初め
天下之事情講究討論等夫々有益之事のみ有之候彼是之處より呼よせ
置度存念迄に御座候 小拙 不埭梅にて看病願の方も今暫は差扣候方可

に當り越前の國
の大藩を協力し
の存る所に定め
られ下は各藩の
むるに盡力せし
むるに盡力せし
に奮勵せり然る
に先生最も他の
指目する所たる
を以て其身を全
するの念無し此
書殊に周悉懇到
なる所以なる乎
蓋し故郷門下の
士其志趣を體せ
んこと希望す
るの意隠然言外

宜哉何れ後便に尙御取遣御談可仕左様御承知可被下候御許事情先々
宜敷方にて珍重に奉存候唯親兵一條は誠に笑止之至りに御座候此許
より御直書持參御使者被差立候事模様にて因ては如何にも可然既に其
議も起り居候而幸蒸氣船も有之御國并薩州へ御家老初御役入四五輩
被差立ては如何と咄し合は致し居候へ共未だ決定には相成不申中根
鞆負先日より上京沼田氏元田へは寛りと咄し合有之聊異論も無御座
兩氏も十分憤發に相成居候趣きに承り申候中根も近日に歸り申筈に
て其上にて議定可致奉存候
一橋公攘夷拒絶御受にて御歸り之上此義は迪も出來不申との趣にて
御辭職御願に相成申候全躰初發春嶽公と御議論合ひ兼候より春嶽公
は御引入に相成一橋公は何も歎も無異議朝命を御受にて今日に至り
御辭職と申ては誠に絶言語申候拒絶之御先手水戸へ被仰付候處水戸
も御断に相成申候償金の一條大もつれに相成薩州よりは手強く申立

候趣に相聞え候
 大樹公御滯京御歸城出來不申に因て當時參府之御家門御譜代大名連
 合一同に上京強て御歸城被相願候申談じ專有之趣にて未だ上京には
 不相成候
 大御目附岡部駿河守一橋公御供にて歸途小田原之宿にて歟鐵砲に當
 り候由死生不相分
 勝麟太郎兵庫之港にて海軍塲を起し大樹公御巡覽之節御直命專取り
 かゝり申候近日勝より門人を遣し御助力相願申候此義は珍重に御座
 候
 幕庭即今の事情は唯々御歸城のみの主意にて外に何も無之誠に笑止
 千萬に御座候尤御歸城の上は大權をも御差上可被成御内議とも相聞
 申候於
 天朝は應司殿關白職御斷にて一條様に御内命有之候處是又御斷三條

様御同様不得止應司様強て御留にて有之候三條様杯も近來は暴論御
 了解にて下々の公家八人程依然たる暴論主張有之由右之次第にて暴
 論も又漸々衰への勢に相成申候只今と成りては
 公武共に實に難被致容躰誠に絶言語申候如此之光景不忍見聞事に候
 えは此許近日一大議論を發し夷人攝海に乗り入るを不待春嶽公尙
 御上京一藩を擧げ御供致し朝廷幕府に必死に被及言上度其言上之次
 第は攘夷拒絶之義は既に天下に布告に相成候事に付今更争に不及此
 上之處は在留の夷人を京師に御呼寄將軍様關白殿下を初め歴々の御
 方御列座にて談判被仰付彼等之主意を得斗御聞取其上にて何れ道理
 可有之其道理に因て鎖とも開とも和とも戦とも御決議被成候えは彼
 是共に安心之地に至り可申候此次第は先日中根鞆負上京幕庭迄御書
 達に相成別紙の通りにて有之候右之次第是非々々御取り用に相成候
 様相願一藩君臣再ひ國に歸らざる覺悟を極め可申との議相起り既に

執政兩三人は内談致し近日に大評議に懸り可申此節之義は一と通り
の覺悟にて打立事にては無之身を捨て家を捨て國を捨るの決定にて
第一春嶽公當公其御覺悟に御決心無之ては連も叶はざる事にて中々
以て大難事に御座候尤も此議御決定に相成候えは隣國にては加賀
是へは先頃執政本多飛騨牧野主殿介三岡八郎祐五郎御使者に被差越此初之事
に付萬事御一致に御相談被成度加州より重々御同意にて有之其後村田巳三
郎青山小三郎被差御國薩州等御使者被差立被仰談可成丈は三四藩も一
越未だ歸り不申候致の上一同に御上京の上被仰上候えは必定治平可致事情に有之候乍
然此一舉は國家身をも捨て候覺悟之上にて無之ては不叶事に候えは
此許御兩君初執政等御決定之地如何に相成り可申哉且又中根鞆負近
日京師より歸り彼表之事情等も得斗熟知の上談決如何に落着可致哉
何様未だ決定之趣意にては無御座候此舉に出で不申とも夷人攝海に
乗り入れ候えは先頃左平太より得貴意候通り其時は全國土浴既に決
定致し居候

大樹公攝海御巡見は大に利益有之兵庫港に海軍所御取立の儀御直に
御差圖にて速に相決し前條の通り勝氏に被仰付候姉小路殿も其跡巡
見にて勝氏より存念十分咄し合に相成り候處同公大に同意にて御歸
京之上 朝暮より表向被仰付に相成早々取り懸り候筈に候此一條は
誠に大慶致し候此事に付ては小拙よりも勝氏に存念申遣置候如何成
り可申哉償金之事元より京師と御熟談と申事にては無之幕府の内議
にて小笠原開老専ら主張にて一旦英人に被遣候約束に相成其後不日
に又難被遣事に變却致し候間英軍怒て軍艦を以て松山の臺場を取り
圍候由砲臺には破裂を恐れ放發不致大恐怖にて早速洋金を車に積み
金川に遣し候故英人圍を解き去候由右の次第にて江戸は開老を始諸
侯役人總て攘夷拒絶不同意水戸殿御先手御出來不被成二番手一橋公
は御引き入實に埒もなき事に相成候京師より責め付け被成幕吏を誅
伐致し候様降勅有之江戸表開老初め盡く引入られ御城中には竹内下

野守殿唯一人之事も有之候由右之通りにて此上は大樹公御直に御東下にて御拒絶の外は無之御暇被仰出候様被仰上に相成尾老公も御同意にて御輔翼被成度との事の由此未如何落着致し可申哉薩州にては此一條に大憤怒其子細は曲直名義を正す時節に償金相渡になりては全く三郎の曲に相成るのみならず此義は
 敵慮も御決定の義なるを三郎へも御沙汰なく天下の公議にもかけられず關東切りの御評議にて御渡に相成候段不相濟と申立頼に板倉關老に責め付け候由板倉侯にては關東にての取計にて一切御承知無之事と御答へ相成候由
 山田宮川江口諸君御打立如何に決したる哉何分相待申候右等の事情にて未だ決議は出來不申候得共何分危急存亡之時節實に盡力致し不申ては不叶事にて乍不及晝夜心配仕候小拙身分一日も罷歸り罪に伏候儀實に慇懃致し候え共何分其儀出事不申御許にては定而様々の悪

評可有御座候え共是又致し方無之社中は勿論左平太共の心痛誠に察入氣の毒千萬に御座候何れ當年中にはどうともこうとも落着可致心力之及ふ迄に相働き自然命もなからへ居候えは早々罷歸り罪狀に伏し御断申上候迄之心底に御座候先今日迄の成り行如此之次第得御意申上度餘は後便に追々可申述候以上

五月廿四日

小楠拜

横久君
 嘉市君
 牛島君
 吉村君
 山田君
 宮川君
 兼坂君

馬淵君	江口君	安場君	矢島君
-----	-----	-----	-----

尙々時分柄御自愛專一に奉存候御許御事情何分委敷被仰越可被下候
 先頃の不快も最早宜く御案じ被下間敷候
 宿本儀は申迄無之御世話重々相希申候
 古京町初知己の方へは御序に可然御傳へ可被下候此書狀は外見一切
 御用捨可被下候
 追啓極密返すく左平太共へは何も不申越候間可然御申聞可被下候
 廿四日本書認置候後京師之事情申來候内左之通り
 廿四日夜四ツ時頃姉小路殿退朝途中武士三人切懸り急所にて即死此
 敵いまた相知れず

主上には大に御逆鱗專御吟味有之候
 償金一條違亂尤甚敷 朝廷より取計候御方々々誅伐可致旨被 仰出
 候處滞京幕庭よりは此一條は江戸にて之取計にて此許にては一切御
 知り不被成御吟味に可相成との御答扱近日に至り關東にて如此之違
 亂甚敷御在京にては可被致方無之一刻も御いとま被 仰出度早々御
 歸國進救之輩御誅伐擾夷拒絶將軍様御自身にて可被遊旨被 仰上有
 之候是より尙更六ヶ敷相成 朝廷より京師御引取候えは擾夷拒絶
 御役入誅伐共に不被爲出來旨にて大權御差上御斷之計策と御洞察に
 て出も入りも成らぬ事に相成候
 幕庭更に亦大困窮に相成り今更申出候儀も取り返しも出來不申より
 尾の老公にたより老公御周旋にて尙又御滞京之御議に相成候え共如
 何の御決定に相成可申候哉誠に以言語同斷絶言語申候
 朝廷にては拒絶之行れかたき事情も

主上關白殿中川宮にては能々御熟知被遊實に大御苦惱にて被爲在候
え共國事掛等之暴論家幕庭如此の僞欺を憎み候より只今と相成候て
は外國は兎も角も先差置き公武大不和大争端と相成實以危急至極の
御場合今日に差迫り申候依之此許一昨日來君臣大評定と相成り今一
左右之模様因て兩君御出京執政以下大小臣大抵不殘程に御供君臣
共に必死を誓ひ爲

皇國御盡力と申所に今日決定に相成候尤此節は天朝幕府の御間柄御
周旋杯と申事にては一切無之本書の通り天下に大義理を御立とほし
被成候御趣意にて有之候尤此許は開國論と申候儀列藩へも相知れし
事故兩君を始如何成る暴發の變難も可有之夫等少も御厭無之全君臣
必死再ひ歸國いたし不申との御覺悟にて誠に人心大に振ひ義勇感動
は格別に御座候既に御決定之上は不可及遲滯旨にて今日直様大番頭
牧の主殿介一組出京被仰出四五日内に立出之筈且夫々御役人御先き

に參り候面々同様被命候兩君へは今一左右御待に相成申候明日より
は高知衆寄合其他御番組士分以上兩君御前に被召出御直に御決心之
御申聞有之筈に候尤此節は如何成る大變差起り候も難計事にて御家
中若者相すくり外は農兵精練を撰ひ三隊被召連精兵大抵四千餘の積
り立にて御座候

右之次第にて一藩中一人も異儀申者無之何も御尤々々と競立何も必
死の心底相顯心地能き事に御座候就中御家老にて本多飛騨松平主馬
柏山城等感激盡力無殘處其外御役人にては長谷部甚平三岡石五郎村
田己三郎等御番頭御用人にて誰某誠に盡力感心仕候唯今一左右相待
靜り返りて罷在候 小拙も勿論上京致し此節は 皇國之御爲存分之
盡力死而止耳萬一にも天運有之生きながらへ候えは早々御國に罷歸
り罪狀に伏し可申候對天耻無き心底今日之盡力に可有之決て御案し
被下間敷候明朝僕歸郷致し殊之外多用にて誠に早々に相認申候何も

筆頭に盡され不申候先此段迄申縮候以上

五月廿六日

尙々本行之通り既に決定之上は更又所置も可有之第一是迄相交候列藩へは申談無之ては不相濟との評議にて村田己三郎青山小三郎杯急に上京被命候其列藩と御國の御間柄は申迄も無之去年來は格別御親陸萬事御申合せ有之事にて沼田大監元田へ被談し合候等其他薩州加州尾州會津等なり
御國暴論家親兵として罷出候事は内輪無御餘義事とは乍申誠に笑止千萬に被存候然し是もめどの申事にて今更申に不及候良之助様御内沙汰も被爲在候御事にて此節は是非々々御上京御盡力被遊度此許にて御兩君も深く其思召にて御座候是は爲御心得得貴意申候此段迄申縮候以上

此書狀は格別知己之外は一切外見御斷且此咄し流布も不致様御心

越候此上申書を
差出されし旨趣
は前段の書簡中
に詳かなり参看
すへし時に將軍
在京なり

得置相願候九郎衛門殿へは極内々にて御差出し可被下候事

越候より板倉殿へ上申の寫別紙とは是なり

此度外夷御拒絶御決定にて期限も被仰出候儀は飽迄御廟算被爲立候上と奉存候えは今更兎角可申上様も無之候え共斯迄御危急之御時節憶察之愚案には御座候え共心付候義不申上候而は不忠之次第に付一應奉汚 清聽度奉存候元來攘夷之策略は我が直を以て彼の曲を討不申候半ては天地間之道理上に於て條理難相立と申候は天下確定之輿論に御座候えは從是御拒絶に付而は猶更其筋詳明曲盡に無之而は被對世界御國辱とも可相成候儀にて不容易御義は勿論と奉存候扱又十日より御拒絶と御申渡に相成差より直様御打拂に相成候儀とも不奉存何れに事情を盡され御應接の上屹度御拒絶之御挨拶にも可相成かと奉存候左候とて方今之夷情決而於東海卒然兵端を開き候には及び中間敷是迄

皇國之内景も洞察罷在由に候えは 御上洛中と申旁攝海へ渡來可仕儀も可有御座と奉存候於關東已に御斷切に相成候處押而渡來之事に候えは彼を曲として警衛之向へ被命直に御打拂に可相成哉と奉存候尤外夷拒絶之 啟慮ハ即チ 皇國之御國是にて唯今と相成候而は御國內に於て決而異議無之事に候えは全世界之道理に於ても必是に歸し可申哉此義は地球上之全論に懸け不申而は決し兼候義にも可有御座哉と奉存候全世界の必是に無之而は地球上の必直とも難申道理に候えは彼是の曲直も地球上の論定に有之度義と奉存候左候えは此度も於東海は已に承服之上忽ち其約を變し攝海へ相迫り強暴之爭端を開き候次第に候彼の曲勿論に候えは其節は不顧成敗義勇之鬪戰に及候より外は無之候え共若又於東海承伏にも至り兼候所より攝海へ乘込み兵器を動かさずして猶又應接之希望候は、從是も平心を以再三再四拒絶の國是たる所以をも御應接有之承伏相成候えは無此上義

自然と彼も又不得止事情國是を以應接に及び是非曲直之公論實に互に難被決事に相成候半ば其次第具に被及 御奏聞彼へも御談之上兼々從 朝廷御倚頼被 思召候諸侯は勿論天下之侯伯諸藩之有志草莽之輩に至迄偏に彼か論說する所の國是を御商議有之彼も又我が國是を列國へ商議之上各條理を推て猶又御應接に被及和戰共に互に必是必直双方内外毫釐の遺憾無之所へ御歸着相成候様仕度義と奉存候近來改而御委任之 御沙汰をも被爲 仰蒙候御義とは乍申恐ながら如從前幕府御私之御商量を以曲直を被決勝敗共に世界の誹謗を被爲受 皇國の御瑕瑾とも相成候義を 徳川の御家に於て御引起し被遊候而は 天朝への御不忠は不及奉申上 御先祖へ被對御孝道も如何可被爲在哉御大切至極の御義と奉恐察候に付萬死を犯し此段奉言上候以上

五月

五月初御側御用人中根鞞負上京板倉殿へ相達候

在熊社中へ寄する書(文久三年)

一書拜呈仕候烈暑之砌各様愈御佳祥珍重に奉存候老生無事に罷在り
 御安心可被下候然は先月未書狀拜呈いたし此許事情得貴意候通にて
 彌以御兩公御上京に相決一藩人心十分激動中々盛成勢に御座候此上
 は過譽有之候而は難相叶京師之事情十分熟知之上其條理に應し公平
 至當之御所置可有之事にて一昨日牧野主殿介青山小三郎上京今日又
 村田已三郎發程其外執政之中も彼の表摸様に應し上京之筈に御座候
 右之面々十分相はたらき見すへ候上大勢被召連候も又者平生にいと
 通り之増供位にて御上京とも可相成且御出京之日限も何そ之機會に
 御出懸けと廟議相決申候人心如此激動いたし候えは議論誠に紛々と
 相成り昨今は大抵鎮靜いたし候必竟執政諸有司一致いたし居候故に

在越前中の書に
 して前書越前の
 國議は變ぜされ
 ども將軍歸東京
 師の事情未た其
 期に達せざる爲
 め遷延せし時の
 書なり

〇

て有之候 大樹公今日京師御發途之御摸様と申參り甚以殘念之次第
 に御座候左候えは此方之舉動も聊變し可申哉何分朝夕之變態にて見
 すへかたき事に御座候
 此許今般之本意は外國へ之御所置は先便さし出候 幕庭へ御書達之
 通り攘夷拒絶之御主意御談判に相成彼等申出之趣至當之分は御取り
 上に相成候様
 幕庭萬事之御不束一々
 大樹公之思召に出候儀にては無之如何に御責被成候而も 大樹公に
 て難被遊御事情に候えは於 朝廷黜陟進退被遊列候方にて有名之
 御方御舉用に成度諸有司之撰舉は必しも幕士に限り不申藩列有名
 之士は御用 朝廷にて御物裁被成度左候えは政出 朝廷日本
 國中共和一致と相成り終に治平に歸し可申候事
 大略右二條にて有之候其餘は枝葉不足論候總て天下之人例之暴論に

恐れ是迄明白に言上不仕實以心と言相違いたし夫よりして攘夷拒絶も御尤と相成り終に如此之至迫之禍亂に落入り誠に不耐痛心事に御座候先書に得御意候通り實以一藩必死之覺悟にて無之而は十分之獻言は出來不申のみならず決而申通し候事は不相成候此節は老生一生に再ひ無之事にて實に盡心肝申候一兩日あとい一首出來申候此段迄拜呈餘は大畧申縮候以上

六月六日

在熊の社中へ寄する書(文久三年)

一書致拜呈候諸君愈御靜安珍重之至りに奉存候 老拙相替り不申無事に罷在り御懸念被下間敷候此許兩君彌以御精勵珍重に御座候福井も殊の外靜安一統一致且明道館紛々此人輩も出席いたし漸々盛成る様子に申越悦入候東北共に何之申分も無之誠に平治に相成申候 水浪東禪寺一條後衛士血戰浪盡逃亡にて

文久三年春
招請に因り越
前より江戸に赴
き滞府中の書な
り春謀候未だ惣
裁の命を受けさ
る前なるを以て
時務上の事に涉
らす

水

〇

幕庭大に人意を強し申候夷人も幕庭無他意事は大に了會致し候然し追々刺客夜討等水浪共治り不申義は日本治道行れ不申故にて甚不相濟次第にて急度御取りしめ可有之左無之ては安堵いたしかたく既に通辨官殺害に付ては英國女王殊之外氣遣に存し軍艦さし向け摸様に寄りてはミニストル之警衛を爲致候存意にて不遠軍艦も着いたし可申候日本にて水浪等制止出來兼候えは英國より軍兵さし向け責潰し可申段申出候由重々尤之申出にて 幕庭も心痛之御事と被存候扱水府之摸様は此節捕れ候者共御吟味に相成候處此者共一致後陣之備三十人程出亡舟より江戸に罷出候約束有之右三十人之者共當時行方知れ不申專吟味最中にて有之候右之次第にて金川等夷人館之警衛も増方に相成候退而近々水戸中納言公御登城御家老并御用人杯も罷出閣老御咄合有之如何之様子に候哉いまた相分り不申候右之外にも天狗黨大分有之扱々絶言語申候然し列藩

中同意と申は薩州長州杯少々之馬鹿物共にて一躰は水府を是といたし候勢絶而無之唯々夷人館等之警衛に及困窮候迄にて禍亂と相成候勢は無之候

對州一條此節は治り可申然處是は獨り日本之大患と申迄にて無之世界之大患とも相成可申哉魯英之勢不兩立遂には亂と相成可申候就而は魯既に黒龍口を取り頻に軍艦等之設盛にいたし候え共黒龍口は九月に至り候えは海水氷り航海相成不申三月より九月迄之海路に候えは殊之外迷惑に候夫故對州手に入り不申而は一向之無益にて有之對州は朝鮮と五島との中間にて唐土印度等アシヤ州に出候門關にて此島を英佛等より取られ候而は魯は全く封印を被付候而聊之働きも出來不申甚大關係之地にて有之候英佛より者魯よりも先きに借用懸り合いたし御斷に相成候右之次第故魯よりは必死に懸り候事情にて候尤此節急迫に懸り申にては無之積り果は甚以六ヶ敷可相成魯英之戰

在越前中の書なり此時長州下の關にて外國軍艦の砲撃を受けて敗を取る將軍は

爭此處より始り可申哉何とも難被申深く可恐は對州一條にて有之候右之外相替申義無之候

老拙も八月半頃は此許出立いたし度既に内意も申談しいまた決定に者相成り不申候え共大抵落着可致候左候えは九月中福井に罷在り十月始より被表出立いたし候えは霜月始には必定歸郷可致届指いたし候えは最早百三十日程之客中大分付け心樂申候此段迄拜呈餘は何も略いたし候以上

六月十六日 小楠 拜

同社 諸君

嘉悦市之進外二名へ與ふる書(文久三年)

一書拜呈仕候烈暑之砌御全家襟被成御揃愈御安康珍重之至に奉存候然者江口列去る九日に着京江口は昨日此許に参りい才御許之容躰承り御書狀も拜見仕候方今之砌因循依舊誠にいたし方無き勢嘆息仕候

江戸歸城の途に就く國論紛々たる所無く紛々たる時勢にして藩に未だ變せず事機を測て出京の准備中なり肥後藩依舊因循危迫の時なり傍觀せし

ん

乍去世界如此之變動に候へはとて其分にては行れ申間敷其上
頁之助様御明達何に御所分も可有御座何分御盡力之程相希候
此許之事情は先月末迄に二通之書狀さし出申候定而御披見御承知可
被下候爾來京師并關東之御摸様格別相替り不申也
將軍様も去る十三日に大阪より御船にて御歸城と申參候關東之事情
は 將軍様御歸城之上は全く大權御さし上關東御保守被成候 幕
議と被存候夫故横濱之様子も殊の外無事江戸内一鉢鎮靜と申參候
長州度々取り遣り誠に絶言語去る五日之戰に長軍敗北六日又々戰相
始まり候處にて小倉より之飛脚京師に到來迄相聞え候定めて六日も
敗北と被存候京師より援兵之御沙汰も被仰出候え共諸藩とて兵を
出し候事は有御座間敷被存候全躰此節之混亂長州より相始め如此之
天下之動擾と相成り候えは長州一國にて相請け破亡に至り候も當然
に御座候外國之事情横濱より申參候には日本國中之内長州のみ抗敵

ん

〇

いたし無道相はたらき候事故此國さへ責潰候えは存意相立餘國へは
聊も手を出し不申との事に御座候何れ當月中には落着可仕候此一亂
にて攘夷拒絶大方消亡いたし候方と被存候
此許も京師追々御役人被差越彼表之摸様に應し御兩君御出京御盡力
に一決いたし今やくと相待申候長之一件は大成る仕合と奉存候い
才は前書に申達候間畧仕候小拙も勿論十分之盡力心懸け罷在候
私身分之儀泰俸之國論之段御別書且江戸よりい才承り申候誠に痛心
之儀は申迄も無之候え共夫等を兎や角申候事にては無御座候是より
御知行さし上候儀可然筋に候えは其御取計被下度奉希候其他當然之
御取計は御懸合には決して及ひ不申候間御見込次第に御取計可被下
候其上にて被仰越候えは宜敷事に御座候吳々も御遠慮等は決而被下
間敷候家内幕し方はどうともいたし候間是又よろしく家内御相談御
世話之程萬々奉希候此段拜呈餘は後便萬縷得貴意可申候以上

六月十五日

横井平四郎

嘉悦市之進様

安場一平様

横井久右衛門様

尙々當夏此許殊之外烈暑難凌御座候御許如何と奉存候江口參り何歟との御國咄し樂申候也

松平源太郎に答ふる書(慶應三年)

松平源太郎は越前の人なり此時先生國に歸り沼山の座に在り天下の形勢益急迫各藩諸侯方向を失ふ者多し乃ち國是十二條を草し越前に贈る松平之を其藩主に呈して後寄送す

六月廿七日附之貴翰先月末長崎より到着悉く拜見仕候先以上々様益御機嫌能被遊御座奉恐悦候隨而貴家御揃愈御安康に被成御起居奉祝候然者
宰相様御出京非常之御盡力被遊乍恐奉感戴候幕庭公共正大之御運に相成兼無限之遺憾に奉存候 宰相様にも御歸國被遊重々至當之御事に乍恐奉存上候爾來薩州間隙彌益に相成候趣扱々致方無き世態に御

る書の答書なり此十二條は建言の部中に載す

十三條

座候貴諭之通り以來皇國之變態本より見詰無之事に候得共當今一般西洋之兵制に一變致し疑々然と憤興之勢甚可賀事に候得共必竟自國同胞相食之私心に發し皇國防禦之本意とは難被申夫故各々外國に親懇を盡し應援求勢にも相成り以來 幕命不行國々割據之形に落入候得者必ず邦内生靈之慘怛に到り可申候其未甚敷に至りては制を外國に受にも至り候勢は決而無之とは被申間敷是等言語に發候も甚耻敷恐敷實以大息仕候然し餘り過慮にも出可申哉高意如何相伺申候
差出し候十二ヶ條政府に御差出之處執政衆より御二方様御覽に被奉呈候段被仰下誠に以て過分の至り難有奉存候右に付御問合御別紙幾回拜見仕候一々至當之御高論更に間然無御座社中に相廻し意見も御座候得は其上得斗話合尙拜呈可仕候
宰相様毎々御直書にて 小拙 救邨之御申込被遊候段被仰下誠に御懇篤之思召九拜難有堪感涙不申候然る處此許之儀は是等之筋殊に嚴重に

有之候間沼山の匹夫毎年之御恩賜にて餘命を繋ぎ何之望も無御座天命に安し罷在候間此段は御聞置可被下候
 弊藩之事御尋被下誠に平々たる事にて耻入申候乍去世子良公子此御
 二方は全く御聰明に相違無之皇國之事情一國の人物邪正等能々御承
 知にて有志之者何も深く依頼致し居候藩籬甚敷習俗にて一切御沈黙
 にて御座候え共自然と内外に響き俗有司輩は何哉らん恐敷罷在候近
 來は執政之面々時世之切迫なるに驚き追々宅寄合等致し大分起立申
 候長岡監物は執政相斷養子實は弟左馬介見習有之に付政府に出席仕
 候此人物は大臣中之秀傑にて世子良公子能々御承知にて内々は何事
 も御打明し御咄し有之候何も扱置藩籬相解二公子御遠慮無之政事御
 聞被成候様に相成り候えは夫より何事も被行可申此等之處左馬之介
 十分心配致し大に都合も宜敷様子に御座候左馬之介は小拙へは極内
 々にて諸事問合遠慮無御座則十二ヶ條も同人には見せ申候處良公子

左馬介とは即ち
 米田虎雄男なり

へは極内々にて入御覽申候右之通りにて此節御問合之別紙も左馬之
 介爲心得見せ申候筈に御座候自然は良公子へも相達し可被成其他は
 不及言上候申迄も無御座候え共此事萬一流布も致し候えは忽我が國
 家之大破壊と相成候間他聞御嚴禁所希に御座候拜話之筋山海に候え
 共何も盡得不申此段拜答仕候
 以上
 九月十二日認
 尚々御端書之趣社中に相傳へ何も宜敷申上候様申出候家内共よりも
 同様に御座候
 左平太共追々書狀遣し彼方大に都合宜敷修行仕候近比に至り此許政
 府より修行料給り兄弟仕合に御座候
 此節は諸君に書狀差出し得不申吳々宜敷御傳可被下候何も付後鴈以
 上

此書は利度の長
州征伐の時に際
せり勝伯神戶操
練場在勤の日な
り

勝麟太郎に與ふる書(慶應元年)

一書奉呈仕候初寒御益御安泰に被爲成御座奉恐悅候然は山田五次郎
歸國御許之御事情具に承知仕候幕庭御威光御奮復に付ては御許風波
増長御痛心之程想像仕候今更驚く可からざる事とは乍申餘り成る御
趣向實以 皇國治亂之分界今日に迫り候にて有志之國々者十分之盡
力いたし此門關は破り不申候而者難叶征長落着之上は諸藩有志之御
方は直に御上洛心力之限御盡し被成度乍不及内輪専心配仕候薩肥越
之三藩さしはまり候え者其餘之諸藩も響應可仕何分此三藩一致之處
第一にて天下公共之國是相立て申度奉存候先達而番町大久保一より
翁なり
御書狀参りい才御申越に相成
大樹公益御聰明に被爲在候故群小相憚り何事も達御聽不申閉塞甚敷
由實に落涙仕候此勢にてはとても關東にて御開明は六ヶ敷御上洛被
遊候へは第一

對

天朝より明白之御議論被仰出諸藩よりも十分之献白に相成り候え者
是非達 御聽可申其上にては是非黑白必ず御了解被遊御明斷に出さ
る事不能勢とも變し可申哉懸神明奉祈候
方今之勢戰爭程大適藥は無御坐薩會越等趣向は相違り候得共因循之
氣習は漸々變却に向い珍重仕候弊藩因循尤甚敷御坐候處昨今出陣に
向ひ候ては何やらん本氣に相成り申候此上一戦いたし候へは勝敗共
に功能可有御坐候逆徒相こたへ誓にても籠城いたし候へは大馳走と
奉存候宇和島老侯明君に相違無御坐候家中一致政事筋も行届申候實
封十八萬石位にて産物輸出之高米穀を除き四十五萬兩内外に至り餘
程富實之由にて征長にもさし支へ無御坐精兵四千餘出し申候近日薩
士五代才助御招請に相成申候私へも追々御近習被差越下問有之乍小
藩頼み御坐候間達御聽置申候此段迄拜呈餘は追々可申上候以上

十一月十日

小楠横存拜

安房守様

御左右

尙々時分柄御自愛可被成候甥共如何罷在候哉不相替怠惰に打過可申候御殿叱萬々奉希候

勝麟太郎に與ふる書

一書奉呈仕候益御安泰に被爲成御勤恐悅に奉祝候先以熊本御通行之砌は坂本生御遣し懇々被仰聞其上金子拜戴御厚情不淺奉拜謝候然者坂本生迄奉願置候養子横井左平太義弟同大平并同藩岩男内藏允航海爲修行差出し誠に犬豚兒之者共御難題に罷成候義は彌奉恐入候得共御門下に被仰付御家來に被召仕被下度萬々奉願い才は同人共より可申上候

河瀬典次罷出拙著さし出候事と奉存候兼而御高話承り居候上平生之志願にて有之閑散に任せ認候事に御座候只今に成り候ては天下之人

元治元年勝氏薩
行の途次熊本を
過く坂本龍馬を
して先を井山
に訪しめ井金を
贈る時に先生藩
の資財を受け家
族を収せられ
て窮居のさきな
り著書は海軍問答
録なり

抄字の巻

情海軍にも異議は無之自然之勢に候へ共唯々 廟堂一決萬牛回首
とも可申哉近々京師之傳報承り誠に因循之極に落入甚遺憾に被存候
必竟は又天下列藩疲弊之極に至り候へは海軍之事も總而費用を厭ひ
人情是又致し方も無之勢に御座候へは此費用を辨する之術尤以大切
と奉存拙著に者三件之事を申立候へ共御取り起に相成候得者必しも
三件に限り候事に者有御座間敷外に肝要之事も一二ならざる儀と被
存候此段之經綸は本邦はいま九開闢之昔にて御座候へはいか計之事
業を起し候儀も難計方今之疲弊を變却仕大富國と相成候事は決而疑
惑無御座候乍然是等之着眼は口に發しかたき時勢に御座候へは先船
を造る用意迄三件を出候事に御座候何分可然御用捨奉希候
今般之御下向御配意之事と奉存候乍然外國人は眼孔遠大にて御心遣
も被爲在間敷唯々内地人情近小其勢因循に落入らざる事を不得慨嘆
之至に御座候各豚兒之事御願申上度餘は大略仕候頓首拜

横井平四郎

四月四日認

勝麟太郎様

勝麟太郎に與ふる書

此書は慶應二年
なるべし越前藩
士末松大谷兩人
肥後より歸路勝
氏に面謁せんこ
す依て紹介の書
なり

一書奉呈仕候愈御安泰に被成御起居奉拜賀候先以即今事情近々申來り順路之御運歟と大慶仕候兼而御高論之通り今日之第一譏海軍之一途に有之開鎖之論杯徒に閑是非を争のみにも何れも被差置此一途に御運被成候へは自然に人心開明は相違無御座候乍去 廟論恐くは此に一定仕間敷深懸念仕候 越老公も御上洛とは承り申候黜斥之諸有志再用之處恐くは出來申間敷二三之人物を差置其他は凡輩のみにて誠に絶言語候御知己之藩にて何分御心配被成下度奉希候同藩末松覺兵衛大谷徳太郎此節歸國仕候兼而御景慕仕候間乍御而動御一面被成下度奉希候徳太郎事は是迄航海に志し彼藩蒸氣船引受乘り廻し罷在候歸國之上都合に寄り御塾に罷出脩行仕度念願に御座候

吳々可然御申聞奉願候

大久保公御再用とも承り如何之次第に而御座候哉 幕庭不相替依舊之御摸様歟と奉存候此公御舉用必ず樞要之地に而は有御座間敷慨嘆仕候此段迄拜呈餘は近々可申上候頓首拜

十一月三日

横井平四郎

勝麟太郎様

尙々坂本近藤二子御塾に罷在候へはよろしく御傳え奉願候先頃は同社之者なる罷出御懇意被成下候段申遣候其外近々出京仕候間可然御申聞吳々奉希候也

勝安房守に與ふる書

一書奉呈仕候殘暑之御愈増御安泰成被御坐奉恐賀候扱京師變動一旦相治り此末如何と想像仕候長は存之外手弱く真に見識とも可申一笑仕候御許航海此節好機會歟と奉存定て御乗出しの御趣向可被在候薩大隅公も不遠上京且其之助も近日此地出發罷上り申候薩肥此節は一

以下の二簡は勝
氏亡友帖に載す
る所にして同氏
の附記を併載す

致可仕大に都合宜敷御座候此二藩主と成り御許航海之御助力も申上
候様に御座候へは列藩も隨て参り候様に可相成薩人高崎猪太郎先日
大早にて罷上り候節拙宅に立寄申候間い才話合訖申候將又拙藩長谷
川仁右衛門と申者此節其之助供頭にて罷上申候此者拙藩にて之人才
にて小拙格別懇信に候間是又い才申談置候乍憚左様御聞置可被下候
事情朝暮の變態にて今日之好きは明日は悪敷相成候間行先き何とも
計られ不申候へ共先今日に付先條之次第申上置候

薩は決して疑惑は無之是は小拙分明に見取り乍憚左様御聞置可被下
候此事に付ては様々之次第も御此段迄拜呈申上候餘は大略仕候頓首拜

八月六日

横井平四郎

安房守様

尙々殘暑甚敷御厭可被成候豚兒共不相替下劣にて罷在可申候萬々奉

願上

勝安房守に與ふる書

先月十一日尊書相達難有拜見仕候益御安泰に被成御勤奉恭賀候縷々
被仰下候趣一々奉敬承候殊に會え御書達重々御至當無間然奉存候如
高諭忠實の意は兼て感入候得共一藩知識に乏敷夫故專征長を主張し
薩へも疑惑致し今日に至り至困之地に落入申し扱々殘念に御座候
大樹公御薨去征長瓦解大難事一時に到來安危寸尺に迫り申し御繼嗣
橋公強て御辭退と承り何れ御深慮可被爲在奉存候皇天若し皇國に幸
し玉へは必ず

賢明の君立せ玉ふへし一新更始今日に有之危を變し安と爲すは更に
疑無御座候不能然れば不可復爲同屬相食慘怛を極め可申候天意何に
歟在るや可恐可懼越老公御出方は誠に急流底中の柱共可申此節は十
分の御盡力可被遊深く奉念願候先達毛受鹿之助より申越旨に御座候
て拙存さし出申候今日に成候ては何も跡事に相成申候拙藩も使者さ

し立國議言上可仕候此段迄奉復申上度餘は後日に言上可仕候頓首拜

八月三日

安房守様

横井平四郎

再白小倉之容跡は夫々御聞に相達可申候先日宮川小源太上坂定て拜謁仕候と奉存候拙藩近況は御承知被下候通りにて澄之助良之助彌以議論明白大に快然たる事に御座候薩とは聊以異趣無御座候何も大略仕候以上

勝伯著亡友帖の附記に云ふ

慶應二年六月余鹽竈中突然として命あり大坂に到る七月將軍大葬の事あり此際之悲惨不可言國家挽回すべからざるの勢益固たし竊に使を馳せて先生の所見を問ふ是其時余に答ゆる者也嗚呼余の日録中詳記して後證に備ふるものこゝに五六年就中當時の形勢また再讀に堪へざるものあり

毛受鹿之介に與ふる書

國家事端起りしより既に十餘年に及び禍亂月日に長進し内は列藩人心服従せず外は各國兵端を開かんと爲る之砌長州御征伐を急務と被

毛受は春嶽侯の御用入なり侯の内命を以て目今征長の事情併せ

て先生の意見な
聞かんを求め
たるに答へし書
なり時に先生沼
山閑居中なり

遊 朝暮之命を以諸藩之人數を被召候處蕪州口之外藩 命に應せず御普代衆にて御討入勝敗互に有之長州方聊屈挫之色無之由九州は小笠原閣老小倉に御下り候處諸藩之人數參り居不申依之諸藩へ頻に御催促に相成り久留米柳川少々人數さし出肥前は中途迄筑前は黒崎迄弊藩は近日に小倉に差出薩州并宇和島は初發より御斷にて有之は長州方先月十七日洋船五艘にて田浦へ逆寄いたし臺場を乗取り直に滞在翌日引島を引取引島は長嶺に而小引島は長嶺に見る下關には大分之人數罷在候由閣老より引島乗取候様下知有之候得共弊藩人數は先手少々參着之日にて外は久留米柳川等些少之人數にて其事行れず然る處英墨蘭三國之軍艦先月初横濱より長崎に參り同所領事官并教師等集會談議之次第は偽勅之一條を初是迄不信義之稜々并兵庫開港之取極め長州戰爭相止め等此節一擧に押破り候趣向之由墨之教師「フルベッキ」より弊藩士人承り候趣也其後三艘は薩州并宇和島を親懇を結候爲罷越候旨鎮臺

に相届出帆外二艘は長州に参り候由薩人鹿兒島へ参居候内三先月廿二日佛艦二艘小倉に参り上陸閣老に面會長州公命を受不申は長之非分にて御征伐同意之由に而長州へは書翰にて説得いたし候旨申出候同日英艦にも参着閣老に申入候趣は征長に付談判可致旨有之軍艦に御出被下度との由内々御聞繕之處征長不同意佛とは雲泥之相違之由閣老御病氣之由にていまた御應對無之旨近日小倉より之急報にて有之候大抵小倉之光景者藝州口既に戦争を始候より閣老頗に乘入をさし急き被申候得共諸手の人数さへ未だ参集不致且三里之渡海長は洋艦五艘を繋け諸藩は其用意も無之勝算一として無之必死之地に乘入候は何方も一切不承知之由肥前は軍艦も有之外に洋船三艘歟所持にて先手乘入候へは直に進發可致との申立にて差控居候諸手一切談議も出来兼候上に英佛黑白之難決を持懸け候得者如何之御議定に相成可申哉何れ曠日持久月日を空するに至るへく更に又如何成る變態を生

し可申哉朝變暮動更に無極勢に相成申候薩州は一切否塞に落入り隠然と一趣向を立専外國と親懇相結ひ候必竟は幕庭舊來之御威光御張立文久度之御改正御引戻し外藩御參豫兵庫海軍御さし止専長州御征伐御取り懸り薩は一々御非政申立屢献白に及び殊に會津とは趣向黑白に相變り彼是今之否塞と相成候譬は長州御勝利に相成候共更に又一大強國之長州眼前に生するは必然にて况哉長州必勝之勢見へ不申候得者所謂是乘虎之勢遂に進退維谷之地に可至伏願は廟堂之上皇國太平之爲萬姓安穩之爲斷然として自ら罪し玉ひ天下人望之名公を御登用簞下有名之諸君子御妙撰内外之隔無く天下之御政事天下と共に被議候御趣向に御改正被遊候得は未だ一令を出されすと云へ共天下之人心渙然と相改歸向可致は必然に而有之候當春大久保殿上阪者火船に而馳登れ然上は外國之信義自然に相立長州之御所置于戈を動り是其確證なりかさずして治り候者更に可疑事に無之候今日之危險實に太平之基に

て不可失之大機會と奉存候頓首

慶應元年丑七月三日

横井平四郎

毛受鹿之介様

任高諭今日の事情承り次第隨而拙意聊附呈仕候彼是忌諱に觸候事不
憚認め候間外間に流布不仕様御心附吳々奉希候以上

認置候中小倉急報之趣英も談判の上長州無道に相極り征長無異存旨
申出英佛共に引取申候段相聞申候外は本行の通り相替り不申候事

薩藩高崎兵部へ與ふる書(慶應二年)

一書拜呈仕候時節愈御安祥に被成御起居珍重に奉存候然は去春は御
書狀被成下縷々被仰下且御茶拜戴不淺恭く早速拜復の處是迄押移怠
慢奉謝候近日村田新八君御來訪にて御様子承り暫御休暇の由彌以御修
養被成大慶の至に候扱即今の世態奇々怪々の變遷とは申なから其病因
より見る時は又怪むに足らず誠に衰弱之極處と存候へ共必竟者様々

兵部は高崎五六
なり此書は認め
て送達の便を得
ざるに封書にて
筐裏に在りしを
載す

邪氣分離とも可申哉良醫之見る處にては必方濟之投し方可有御座候
尊藩諸君何に御盡力之場と奉存候 拙存 者村田君が御咄し申候御同人
より御聞可被下候夫は兎もあれ箇様之世變に生れ候へ者非常之大精
神を養ひ不申而者善惡吉凶之觸れ來に従ひ我靈臺之屈伸と相成り耻
つ可き事に御座候へ者 老拙より 身に受て深く覺も有之大に修養之力
を盡し聊間斷無き様に心得罷在候如此養ひ不申而者萬一之大事に當
り畏縮仕るは相違無之誠に残念千萬に奉存候才も智も何も此大精神
より引廻す事に候へ者人間第一之尊き處須臾も不可忘と奉存候 老拙
心上如此爲知己不得不言扱又此養ひ様者定て御心得可有御座態とさ
し扣申候賢契以爲如何必ず好便御報奉待候此外山海拜話仕度候へ共
何も筆頭に盡し得不申御安否伺旁拜呈仕候頓首拜

十月十九日

横井平四郎

高崎兵部様

尙々時下御厭被成度 老拙極て平安に罷在り御休念可被下候近頃者酒も小酌養生のみ心得罷在候御一笑々々

米田虎之助に贈る書(明治元年)

一書拜呈仕候先以

御兩殿様益御機嫌能奉恐悦候隨而愈増御安泰に被成御勤仕珍重之御事に奉存候

若殿様御着後最早大分日數も重り御改正大分御乗り付に相成候と不遠御報告も参り可申相待罷在候何角御配意御多用之至りと想像仕候扱此許種々の弊政相重り此度御一新御改正に相成りい才別紙之通りさし出し何も御推察可被下候小生事過當之御舉用位階迄も拜戴誠に無存懸萬々奉恐入候定而御一笑と奉存候日夜多事老躰實に堪へ不申夜分一酌仕のみ樂地に入申候御憐察可被下候 孤雲老御免許に御決議近日に御達放可有御座不遠歸國と被存候別紙

米田虎之助は男爵米田虎雄なり當時熊本にありて藩政を執る故に京師新政の事情を通知せられたるなり

先生の手帳中左の建議案を記するあり曰く會計局急進に付き東征平治に至り候迄御役給減省被仰付左の通りにては如何

に拜呈仕候通り公卿諸有司是迄無謂御舉用月給一月實に因循之甚しき此節過半以上之減少に相成昨今は怨嗟の聲のみと被存候此段拜呈餘は後便に可申上候頓首
閏四月廿八日 小楠拜
米太 玉几下
尙々乍末
監物様へ別呈不仕可然奉希候新堀老人同様不惡御申傳可被下候以上
別啓
新政是迄之次第にては種々因循に落入第一公卿初め其人にあらずして猥りに御舉用に相成御役人上下に懸り夥敷相成且諸局名々各々に趣向を立本末一切貫通不仕制度も亦自然に混雜致し實以て無致方次第と罷成候故第一御政躰の大趣向を被立其任にあらざる人物公卿始

め一切御退け其中より御登用に相成且つ廣く人物御求め諸職に被任候筋に御座候物而是迄の通り諸局隔絶仕候者必竟御政体立兼候而已ならず人材其根本に不居して諸局に分離いたし候に本つき病源分明に相見る故此節第一三職を被建左之通

公卿已下末小吏に至迄減省半分に至申候

公卿初末々迄御所附者皆俸祿御加増之御決議に而御座候近日御達に可相成候

一所々裁判所最弊害有之候間知府事縣令等に被改候等級等は政體書に有之候間略之

一輔相岩倉公

三條公も御一同被仰付候筈之處御東下に付欠員御歸京之上被

仰付候筈

一議定二官同職に而御間も一席也

一參與

一辨事

右委細者政體書に有之候間略す

上より出候儀者輔相より議定參與に御渡し下より出候事者辨事受取議定參與に相渡し議定參與に而議定いたし輔相に而御斷決

主上に御同相濟候上辨事に御渡夫々執行に相成候夫故辨事を行政官と被命候

一議定

中山前大納言

正親町中納言

徳大寺中納言

中御門中納言

越前前宰相
肥前前中將
薩摩中將
阿波少將
一參與

小松帶刀
大久保一藏
三岡八郎
添島次郎

後藤象次郎
廣澤兵助
福岡藤次
横井平四郎

○右の内福岡添島者和漢西洋之制度に委敷此節之御政體も全く兩人に而調出候事

一辨事

人名等未相分不申候近日に日誌に出候筈にて畧之

一八局之中内國制度被廢候軍防も海陸軍相立候得者被廢候筈
一位階を被下候儀は右三局御政事之根本に而外國に對しては大臣と
稱し候事に而輔相之御任體三位之右衛門督に而者是迄之御格合清華
以上之御方に者手を突き御咄合有之候位に而御大政御執行者決而出
來不申候に付二位之右大將に被任議定も四位之諸侯に而者御同様に
付二位之中納言御宣下參與者諸藩士之御撰出辨事者公卿諸侯も被仰
付候得共三ツ之二は藩士に而相勤候者不被得止事參與に四位辨事之
藩士に五位階を御宣下被仰出候然處岩倉公に於ても甚た御心痛議定
之諸侯并參與辨事之藩士者勿論之事實に當惑至極に有之候得共御政
體に於て不被得止事之條理に候へは御辭退申上候者不罷成去迎直様
御受申上候儀は心底相濟不申今暫之處人心折合候迄御受不申上宣旨
者辨事に預け候に申談今日大略相決申候
一太政官諸局人名は近日黜陟相濟候上出版布告被仰付候筈

一海陸軍者先陸軍より御取起先日一統御達に相成候通に御座候御し
 らべ萬石拾人之出兵壹人前百兩之出銀右之内先三人之出兵に而此兵
 士出京之上十分精練之處にて尙又三人出兵右同様左候得者十人之出
 兵相揃候迄は來春夏にも懸り可申候關東會津平治し右出兵過半にも
 至り候者京師不虞之御用意は充分に相立自然に諸侯互之猜忌も相歇
 所々警衛御人數等一切御解放に相成總計之御手廻に而出京に相成候
 者必然に候御國に取りてしらへ見るに五百四十人之御人數に五萬四
 千兩之御公役餘者一切御出方に及び不申諸藩皆同斷にて富國之道者
 兵を省くに如くは無く公私に於て至極之良策と奉存候
 一關東大久保勝之兩子非常之盡力に而徳川氏彌以服從に相成御處置
 として三條公閏四月十二日御發途大坂に四五日御滞り蒸氣船より御
 東下に相成申候此元に而は右御報告を日々相待居一兩日には報告を
 不待御處置筋御評決に相成候筈に御坐候大勢百拾萬石より百五拾萬

石迄に而宗社を被立候見込みに候併三條公報告之次第に仍而は御處
 置筋相替り可申候
 一會津君公者謹身長髮入寺家老壹人切腹服罪之由に相聞へ候未表立
筋々
 之報告は家中一統者矢張枕城之勢に而別而越後之方手固く相固め候
 旨に而彼表先鋒より報告有之先鋒物督岩倉公輕騎に而一日も早く被
 押詰候様且肥前雷流丸外に一藩名前海軍被差立長薩之海軍と力を戮
 候様一昨日太政官より被仰付候
 右之次第に而不遠北陸も一戰に相成可申候
 一野總所々之戰爭多くは江戸之脱走浮浪之徒等にて有之尤會人も少
 々宛は加り居候由也戰爭之次第は日誌に有之候間畧之
 一東海道へ者一昨廿五日柳川人數貳百五十人繰り出二十より三十
才迄之内
 六日備前に而も候哉一備繰り出今廿七日阿州勢も同様右之次第に而
 追々諸藩出兵此方様同斷出兵被仰付候事に付一日も早く御人數京着

江戸御人數繰替等之儀有之度相待候
一大坂裁判所被廢知府事に被改長谷川岩下直に知府事被仰付候筈に
御坐候木村得太郎日州富高之縣令に轉任之筈全牀諸藩御預地は一切
御取上縣令支配に相成候筈に御坐候
一山田五次郎昨廿六日會計局出納司權判事被命候事
大畧右之通に御座候餘は追々言上可仕候已上

關四月廿七日

横井平四郎

米田虎之助様

矢島恕介に答る書

去月廿四日之御狀相達忝拜見仕候先以 御兩家上々様益御機嫌能奉
恐悅候隨而愈御安康に被成御勤珍重之至に奉存候扱今般罷出候儀に
付縷々被仰下忝く奉存候如命人事萬變一として不可期唯々御自愛專
一に奉存候九州之趣且此許之様子等は榊原氏より夫々御承知可被成

矢島恕介は越前藩士なり江戸に在勤す先生越前に在て答る所の書なり

略仕候御許 廟堂之人才一に如高論推量仕候正俗共に一偏に落入互
に相争候世界に而中々中正之條理分り可申様無之二千歳之氣習無致
方次第に御坐候乍然西洋面へ追々入込候へは不遠人情世態漸々分
り可申是のみ樂可申候外には誠に所分無御坐困り入申候尤今日に至
り内は水府之亂外は外國に被押懸 廟議誠に大困窮に候へは自然と
他人の了簡を聞度心得には相成居可申然し夫れとよし出し候事は夢
々有御坐間敷有志者心得罷仕候事に奉存候
千本氏御壯健に奉存候可然御傳致可被下候御許殊之外之大暑之由此
御許は去夏通り而雨勝に有之格別暮し兼る程之暑には相成不申三
ノ丸例之蚊夥敷盡も出候而仇を成し大困窮に御坐候何も替候儀は無
御坐候拜復迄艸々餘は付後雁申候

七月二日

平四郎

恕介様

尙々御端書之趣悉し故郷老母初何も健強にて罷在安心仕候例之御好
物は如何定し行れ候事に奉存候 小生 近日たにかいさし起り一滴も給
られ不申候雷巷先生門下と罷成御一笑可被下候雷巷春以來禁酒于今此
相續き珍重に御座候
御許に罷在候節大坂に而丹釀相と、のへ三國廻しの手敷致し置候處
近日に着いたし候趣平瀬氏々別に相承丁度長谷氏も 小生 同様たにか
いにて引入に相成居候間一絶を贈り申候

同病一旬不把杯

閑分茶品亦悠哉

阿々何事酒魂動

人道丹釀入港來

以上

加藤藤左衛門平瀬儀作に與ふる書

加藤平 共に越
前の人なり交長
の事を管して長
崎に在り因て寄
送する所の書な
り

大坂よりの御家書相違候段雷庵先生より承り先々目出度御出帆可被
成珍重に奉存候此許聊相替り不申のみならず近日廟堂大に慣屬之勢
可相成乍病中夫々之心配いたし執政參政執法長谷等日々程に出會何

角申談し存外之開發珍重此事に御坐候御許之沙汰も此節第一に申談
し候事に而近々御咄合申候通り利政仁政之分別其形は一にして黑白
晝夜之相替り有之尤以國家之大關係に而御坐候間廟堂より勘定局製
産方等は推し開き國是を立候筈に有之候右之通に付其御許に而も深
く御思惟此條理に聊たり共變り不申様萬々祈申候清三郎定而子細之
御講習に相成候事と奉存候何分此條理明白胸中私欲之念を斷正々成
る處に參り候様萬々奉存候可然様御致聲可被下候來春は御暇相願一
と先歸郷いたす筈に有之候間相願置候鍊翁并名家四時山水其上乾堂
書乾堂書相願置候外にふすま二枚分同様
書に於て陶淵明歸田園之内相認吳候機何分可然御心配被成下年内中に
熊本に御廻し可被下候嘉悦も一兩日中に此許出立之筈に御坐候相願
置申候包物類熊本廻しは乍御多用急着之方相願申候先者此段迄拜呈
餘は何も略いたし候以上

九月十五日

横井平四郎

加藤藤右衛門様
平瀬儀 作様

尙々小生病後今以勝不申雪中嚴寒誠に恐敷候間暫歸郷之段及相談候へ共何分出來兼困り入申候來春は早々歸郷之打立只今より取りきめ置き申等に御座候老杜云

多年多病久爲客他席他郷獨上臺

甚自憐の至御一笑々々

矢恕に贈る書

八月十一日之御書狀相達忝く拜見仕候秋冷之節愈御安康に被成御勤珍重之至に奉存候此許相替申儀無御座 老生 事十二月下旬々瘧相煩餘程手強き邪氣にて御座候所幸一切にて再發不仕然し老年之事にて全快極て遅鈍にて今以外勤も出來兼申候何れ來月初には全復可仕御安心可被下候

君子所置之二條一々御尤千萬常人にては疑惑を起し候事當然に御座候

三代以後之君二た通に有之段是又御尤に奉存候要之心術の工夫無之故性情之上より發出致し不申大抵私見に落申候賈生杯之如き古今の慨嘆總て文帝之用られざるを申然るに文帝をして用ひしめは吳楚七國の亂不待景帝起り可申是負け候ても兄弟叔姪骨肉相戕彝倫之滅却なり又勝ち候へは天下之亡滅どちらに取りても絶言辭申候流石文帝天資仁愛の君にて用ひられざるは重々尤千萬乍然天下の亂は無程起り候事は文帝も承知之通何必賈誼のみ合點いたしたるにて無之天下聊有志者は總て見へたる事にて唯々文帝致し方無之心痛に押移被申候夫諸侯を驕らしめたるは必竟文帝姑息因循の心底に此大弊を生し出し候事にて此時に至り文帝致方無之場所に相成候大道を見候もの有之候へは文帝之心術之曲々此大弊を起し候根元に至り及講習如何

にも心術を正し朝廷百官の心術に及し義理正大の政事行れ候へは七國何も異存有之様無之必ず敬服致し無事に治り候は決して疑ふべき事に無之候去れば賈生が立言は扱も不仁之甚敷事にては無之哉此一條を見て凡秦漢以來名君名臣と被稱候もの、私見たる事分明に相見申候總して後世の者は弊は事柄之上に生ずると思ふは古今一般之了簡に御座候其故何の一事を議するも先き案しと云とに相成一寸も行れ不申扱々可笑事にて有之候弊は總て其人の心に生ずるものにて其の事好き筋なれ共行れ不申上下にて云へは上之命令下に行れ不申は下の人服し不申故なり其服し不申は上の人之私心故其私心を怨みたるなり外に子細は無之候孟子の所謂生其心害其政又以不忍之心行不忍之政明白なる言なり去れば命令法度之行るは其君相の心公平にて私なき下の人服する故なり左なきは上に私われはなり下の服せざるが弊にて別に弊は無き事なり如何々々

幕廷近況の摸様不相替因循と被存候水老調和のみに相成候歟と被存候何分致し方無き事當分はとて混乱迄には高きに登り眺め可申事に奉存候

此許齋石連亂も無事にて治り可申此段迄拜復仕候已上

八月廿日

小 楠 拜

矢 怒 賢 契

尙々秋冷に相成暮能随分御自愛可被成候已上

長岡監物に與ふる書

乍譚拜呈仕候近來御勤學以前の通に不被在共にて者無御座候や御會讀御咄等に罷出候ても御新得之御高論拜聞不仕のみならず御誠意之人にうつり候處何と無く以前と相替り候様に奉伺候萬一左様に共被爲在候ては此道之衰廢

御國家の傾運甚大關係之事に奉存候申迄も無御座候え共學問は脩身

監物は即ち長岡
是容なり此復
は先生深く是
に望む所有り
に或は面論或
書簡を以て切
せり其交置以
見るべし依て
容復書を併載
下同

之事業に御座候得者彌益強勵の力を用ひ讀書無懈怠參り可申事に奉
存候此段先頃より申上度心得に御座候處何角と押移り今夕罷出候得
共他人も御同席にて相憚り必多もの延引仕候間書中にて拜呈仕候不
願鄙意奉犯尊嚴候義は誠以恐懼之至に奉存候以上

四月十一日

横井平四郎

監物 様

御左右

長岡監物之書

一昨夜之御書面反復熟讀御教示之趣彌添存候固り辨可申様茂無之聊も御氣遣
被下間敷候新得之説等御話し不申候は去夏頃よりかき覺申候少し存念有之而
之事に候しかし誠意の人により候處前日に異り候との御書面を以得斗相考
候えは是非此道世にも人にも中志は近來甚薄相成唯我一人と申様なる心
持に相成居申候此所大なる曲ひ事かき存と當り申候如何猶御遠慮なく御教
示可被下候將又一昨夜御囀之佐敷之書翰餘程吟味いたし候得共見出し不申猶
精々吟味は可致候え共何程に可有之説甚以心痛の次第に御座候何様右之趣を

以先凡出候迄之處宜敷々々御頼申候此段も任序申進候不具

四月十三日

長岡 監物

横井平四郎 様

差置

長岡監物に與ふる書

尊書謹而拜見仕候被仰下候趣夫々奉得其意候此學元より御懈不被爲
成安心仕候様必竟淺心寡慮より奉伺甚以恐入奉存候乍然此御言を奉
敬承未學之身分一段之精神を益候心地仕感憤之至に奉存候御新得等
之御咄無御座儀は去夏頃歎御存念之筋被爲在御工夫之處にて御座候
段成程去夏頃歎其御存念私へも被仰聞慥に覺え罷在候然處一切程に
御咄無御座儀とは不奉存より御新得之御高論拜聞不仕と言上仕候其
子細は此理發明いたし候得者己が受用はさし置き先づ人に咄し度心
御座候間此心を省察仕妄に咄不申歎所謂爲己之處にて學者尤も可用

心處勿論之事に御座候乍然又あなかし人に咄し不申にても有御座間敷事は此理元より無極發明新得無疑存候筋も或は不覺私見に落或はいまた其理を盡し不申事のみ多く御座候故其人に候而者咄合候えは存外之益を得申事に御座候此意思者彼之發明たて之外況哉聖賢之言語意味深重にて彼よりして説き是よりして言ひ或は淺く或は深く一方ならざる之活理に候えは其意を不得して疑惑を生し候事尤も夥敷御座候是等之處咄合候えは意量之外なる合點も参り其益尤も不少被存候是故古今朋友之交を大切に仕君臣父子之倫に同じく仕候者あながち切磋琢磨之益薰陶觀感之位迄に限り不申講習討論平生致知上に於て尤得益之處に關係仕候然者平日讀書に心を盡し脩行仕候得者右之會得之筋も有之疑惑之筋も有之何分同學之人に咄し不申而は不叶之意思より寄合候ては此學事之詮議に相成候は必然之勢と被存候尤其場にて發明たての心さし起り候事も有之是は直様克

治之力を下可申如此心得候筋にては無御座候哉如何に候

御誠意之人にうつり候處前日にかわり候筋之言上にて是非共是を世にも人にもと申御志は近來甚薄被爲在唯御一人と申程成る御心持にて此所大なる曲せ事歟と被思召當候段是又私存念とは些こし違ひ申候私存念は内にあるものは必ず外にあらわれ候筋より申上候譬は唯御一人と被思召候御心深切に御座候えは其御一人と思召候御心之なりに必ず人にもうつり申候又世にも人にもと被思召候御心に候えは其世にも人にもと思召候なりに必ず人にもうつり申候何にもあれ心のなりに人にもうつり申候えは其うつり候處にて我心之正不正厚薄淺深顯然と相知れ候間此に就而省察仕歟外に因て内を制する之工夫と被存候特又此道を世にも人にもと志候は恐くは氣之上より生し眞實底心に思ひ入候者にては有御座間敷被存候是は私身に躰し考へ候え共以前之心は世にも人にもと申程成る意思にて御座候處今日之心は聊

相替り何歟己を成就せんと思ふ意思に罷成左程世にも人にも求め無御座程に覺え申候今日之心歟宜敷方かと存し以前之心聊以戀しくは存不申候乍然如何可有御座哉思召奉伺再應之奉復御而動可被爲在奉存候え共存付候次第其儘に而差置可申儀にて無御座尙言上仕候以上

四月十五日

横井平四郎

監物様

尊下

長岡監物之書

頃日御教示之末是より申進候處に付而猶委細之御高諭萬々奉存候勿論一々敬服いたし候尤新得之説も御話合不申候一段井に世にも人にも相認候心得は全く前書筆足不申候處より御疑惑にも相成たる哉も存候右之譯は今由中試度筋も有之候得共紙上にては意を盡し兼候而已ならず折角御教示之末彼是辨下候様にも相聞候ては意味氣象甚以不面白候間何卒不日拜話御示教も仰申度候右迄不備

閏四月十五日

長岡監物

横井平四郎様
御報

元田永孚之之手翰(文久二年十二月より明治元年十二月に至る凡六年間)

一書拜呈仕候時下愈御安康に被成御勤珍重の至に奉存候此節御許御留守居被仰蒙目出度奉祝候然ば私事不慮なる變難に逢ひ誠に痛之至御察可被下候定めて御承知と奉存候間委細の儀は略仕候就ては春嶽公思召之筋被爲在龍ノ口に御懸合之上ト先福井表に罷越候筋に相成り今晚此表出立中早にて罷越申候右に付て御内談之儀も御座候間御目附郵田已三郎此紙而持參致候間御逢被成下萬端御咄合可被下候委細は村田より得貴意可申候此段迄略呈仕候以上

十二月廿二日

小楠拜

茶陽賢兄

尙々福井より宿狀さし出可申候御届吳々奉頼候

全

恭く拜見候誠に至極の炎威難堪事に御座候別して御城下御暮しかね
被成候と想像仕候扱脇差代三十金御贈り被成下儘に落手仕候賑々御
世話被成下候と奉存候御庇にて益仕舞快く仕拜謝難申盡奉存候
京師之成り行甚だ案勞仕候如高諭全閑是非之事扱々無人界にて御座
候

宮川罷越候段米家書狀參り別して咄し合の都合可宜奉存候此上攝津
如何の落合相成可申候や何分上京出来候様に祈申候

廟堂無事泰平之段珍重に奉存候餘り暑さにて日々裸躰に押送申候聊
涼氣催し候えば御光駕萬々奉待候先拜謝まで早略申縮候頓首

七月十一日

小 楠 拜

茶 陽 先生

尙々新堀も漸々快御座候由珍重に奉存候左平太共去十二月晦日と三

退 啓

月之狀一同に到着悦入申候少々は新聞も有之何れ近日さし出可申候

手製茶乍聊か拜呈御味可被下候當春は大分よろしき評判に御座候以上

小 楠

全

先日は遠路御光駕被成下忝く久振に得高話大慶此事に御座候其砌御
入れ物返上仕候且又御約束之村醪さし出申候御笑留可被下候此段ま
で拜呈仕候以上

九月廿七日

小 楠 拜

茶 陽 賢 兄

全

忝く拜見仕候昨夜は賑々御氣削被成候と奉存候扱小倉御引わけ誠に
神速なる事にて流石に隠居平生之精神感心之至に御座候惣て萬事定

以下八通元田永
字に與ふるもの
多くは熊本藩に

關係の書にして
面語口抄の餘な
るを以て最も簡
略なりと雖も亦
以當年の時勢を
見るべきものあ
る故に之を採録
す此他元田氏と
往復の書多も必
要なきを以て略
す

て無殘處行届候事と豫想仕候

御廟議符節を合せ實に恐悦々々京攝御献自今日は定て相決し候もの
に奉存候實以一刻も早く被差立度萬々奉希候如此瓦解に相成候ては
是より先甚以六ヶ敷とても幕庭は是迄にて被致様は有御座間敷定て
關東御引返と被察誠に諸有司之罪絶言語申候夫はさておき此方様御
國議尤御明白に御立被成不申候而獨立致しがたき勢にも相成可申哉
兩賢公子御廟算格別之御剛決可被在夫のみ豫想仕候先此段まで
拜復す朝變暮動一兩日には尙又御摸様相開奉待候頓首

八月三日

茶陽先生

全

御念書縷々之趣拜承仕昨夕山田参り一ト通り承り勿論何之見込も無
之重々御同意に奉存候今日の危迫に至り廟堂俗論誠に沙汰之限に候

小楠拜

え共夫はありまへの事怪むに足らず候末章之雲上御摸様難有御事に
て引入も何も此上は天にて唯人事を盡され候迄と奉存候山田定て参
上可仕略仕候

日向小倉天草被仰下辱く奉存候小倉人質にて無事に治り候えは珍重
に奉存候萬一再戦に相成候えは老幼婦女等實に不忍聞事に御座候
山田咄しにて京師も存外よろしく御座候由珍重々々然し一向に安心
は聊出來不申候先此段迄拜復餘は他日に付申候以上

十二月十九日

茶陽先生

全

昨日者御書狀悉く拜見仕候先以政府御都合恐悦千萬に奉存候左馬助
殿甚感心之至り是よりは彌響出て可申深依頼仕候
兩貴公子如此根本御確立之上は是迄之習染は自然に消解疑無之何様

小楠拜

一新之基本相立雀躍仕候四五日以前よりシヨウレヲ邪發起腹痛甚敷
今以横臥出来不申食も甚だ乏しく漸く湯の子迄僅に給居候處今朝は
大分快く覺え再たきを二膳給申位に相成申候此分にては四五日中
は起き上り可申候少も御氣遣被下間敷候先拜復迄仕餘は大略仕候以
上

七月十八日

小楠拜

茶陽賢契

御別紙委細拜誦仕候一々御尤千萬至當之御所置と御同意仕候何も外
に愚存無御座候事

全

御念書忝く拜誦仕候先日は久々得寛話大慶仕候扱一件二の丸に御咄
し合に相成深同意被致候段重々大慶に奉存候正風俗一條縷々被仰下
夫々敬承仕候先頃は得貴意候通り一等引き下げ方今之勢に就き他の

目的明に行候上風俗正敷相成候事と及御咄合候得共原頭より論じ來
候えば一々如來喻一身修養より推し及候筋にて堯典に所謂克明俊德
以親九族々々昭明協和萬邦云々二帝之治化此外に無之此一條大夫父
子深く了會被致候えは其他は氷融之勢と奉存候唯々可恐は當路之諸
君子書物説と迂濶に被心得候は必定にて大夫父子十二分之了解十二
分之明辨無之ては空論に落可申此處能々御勘者可被成候七條之内に
信賞必罰を加候えは可然歟先頃は舉賢退不肖に附候御咄し合にて候
え共尙考候事に御座候

御狩場の條御郡代申出之通りにては重々恐悦奉存候然し尙小前の處
監察より聞方致候様に有御座度奉存候

京師の次第被仰下思召重々御尤に奉存候彌以幕威御張立と被存誠に
慨嘆の至に候

薩の事徳富太多助より承り定て同人罷出も可致哉御聞取の上二の丸

へ御達可然奉存候流石大隅君非常之人才には相違無之可憾は天地の
大道承知無之事爲之末のみに馳られ残念々々此段迄奉復餘は付後日
申候頓首拜

十一月十日

小 楠 拜

茶 陽 先 生

尙々御改作拜見別段に覺申候 小拙も内藤まで少々愚案嘯しおき定て
御承知可被下候不備

全

秋冷御同慶に奉存候勝先生紙面等は定而御差出に相成候事と奉存候
紙面の趣に候得は越は勿論幕庭にも大分趣向打替り摸様に相聞え謀
らずして御國議と一致いたし恐悦に奉存候此上は良之助様御乗出し
の一段大關係仕候惣而高貴相手之の判決はいかに重役たり共臣下と
して出来兼候得は千々萬々御出方被遊御事に奉存候惣て長州も薩へ

申入御國へ依頼之一條も有之近年來之大火事は御國より取消し遂に
大平の治本も御國より取り立候大機會全く今日歟と奉存候如何々々
御國議相決し候上は早速薩へは御使者被差立十分之論決に相成度奉
存候此御使者は尤御人撰第一に奉存候
勝先生紙面等の寫拜領仕度急に返事仕 小拙 丈之存意申遣候筈に御座
候尤御國議等内密の事は何もさし扣申候此段拜呈何も大略仕候以上
七月廿四日 小 楠 拜

茶 陽 先 生

尙々新堀病氣は彌以宜敷相聞え候哉甚氣遣仕候 小拙も一兩日は大に
甘快殆平生通りに至り申候御開暇も候えは御來駕待奉候以上

全

去十五日之勞書悉く拜誦仕候件々被仰下之次第夫々拜承仕候即今之
成り行先一幕相濟み可申と奉存候

京師山田書狀御一見と奉存候就ては社中申越候筈之話合も宮川列
か御承知と奉存候
道家御講習之御書附寛りと拜見仕候聊異議無御座候何分底心合點致
し候様重々相祈申候即今一人之人物此上見識進歩仕候えは誠に國家
之御寶物に御座候先此段迄拜復仕候小春之晴暉沼山風光よろしく御
來臨萬々奉待候頓首

九月廿五日

小 楠 拜

茶陽先生

尙々御端書之趣御多念に奉存候吳々もよろしく御傳致奉希候以上

全

昨日は御書狀被成下忝く拜見仕候縷々被仰下候次第夫々拜承仕候二
ノ九一條之儀餘り御多念之至却て痛入奉存候父子此處了解に相成候
えは重々珍重至極と奉存候此上御配意吳々所希に御座候御國論相立

兼切々笑止千萬に奉存候昨夕は津田久し振りに寛々話合 小生 丈は盡
し申候大抵は合點いたし候様に御座候尙得斗御話合可被成奉存候
道家御話合一兩度位にては解し中間敷是は此人之病にて此上追々御
話合に相成候えは自然とぬしか了解に相成申候間ぬけ無く御申談可
被成候

越に遣し候書附是は極々大急に相認識に疎漏に御座候津田へも見せ
得斗話合津田持參越へも參り候筈に申談候米家へ御見せ被下度との
儀 小生 方も其通りにて良公子へも奉入御内覽心得に御座候此節之折
柄越へは申遣御國には沙汰無しにいたし候にては相成不申候是迄も
其心得にて越への申遣し事は必米家に差出候次第に候えは 小生 方も
米家に出し候は内達之心得に罷在候此御心得にてよろしく御取り計
可被下候先此段迄拜復餘は草縷申縮候頓首

十二月六日

小 楠 拜

茶陽先生

橋公御誠意御培養第一義

征長御解放し列侯の言御聞取に不及

件々の御非政御手切にて御改正

兵庫開港御手許にて被發候様

皇國一致の海軍

全

悉く拜見仕候先以一昨日之御黜陟宮府一致之御趣向殊に御三殿御一致大政府と同様恐悦無限之至に奉存候縷々被仰下候通りとて此面々にて持届候筋にては無之先きの處は兎もあれ今日之勢誠に難有次第に奉存候將又郡勘監察御黜陟可有之段是にて格別人心も大動可仕候

同社其人物無之儀は誠に恥入申候牛島五一郎儀は御注文に相當いた

茶陽先生

し候人物外に比類は有御座間敷昨年小拙御家老衆應接之時も撰擧いたし候此人御目附被仰付御試被遊度其公子へは定て御承知と奉存候御奉行被仰付候ては道家以上に上り可申候此段は左馬介殿へ言上可被下候其外吉村人物御目附には十分と奉存候此人物は其毛色悪しく候え共胸中は外々かは一一段明り有之候然し一ト通りにて見え兼候能々御吟味可被成候先此段迄拜復申縮候以上

十一月二日

小 楠 拜

尙々新堀不撻梅甚氣遣申候何分養生祈申候小拙も近來は些不撻梅にて専養生にうち懸申候長崎へ附方参り一兩日なは其手當に取り懸り候筈に御座候四五日中御來駕可被下段自由にて御話しは出来申候とても御面話にて無之ては心中盡しかたく何分御待申候以上

全

時分柄珍敷暖和に御座候扱次第に押詰候處にては在中殊の外大困窮に落入候勢は追々御承知も可有之と奉存候必竟は五畿内北地去る八月風水之害も候へ共是は十分之一二分にて下關運漕塞り候より九州北國諸物滞り融通出來兼候方の事にて京坂は諸物拂底米價莫大に引上げ九州北國之大困窮と相成申候夫は先扱置御國之情態一統金札一切乏敷候故米を初諸物必死と滞り夫の上三百五十目と云大坂目莫大の當なり御双塲根段被相立候方在中一統何方も上納さし支へ大困窮に落入候米粟たばこ等の品物持ちなから如此の仕合は誠に珍事と被存候殊に阿蘇南郷等の北地は下た地キ、ノに相違無之のみならず去々年來宿驛の人馬に疲居候て必死之困窮一切御役人聞入無之故内收會所には不容易張り紙坂梨には付火又は二ヶ村々強訴之打立等も可有之風聞甚以恐敷黨民も起り可申大に氣遣事に御座候右等之次第一日も早く二ノ九承知に相成申度河瀬安兵衛能々事情承知致し候事故速に安兵

衛被呼寄下情聞取に相成度吳々奉存候熊本も御案内通り御藏切手一切買方出來不申候にて御承知可被下候此處置は預貳百萬兩も作り出し在中諸物借り根段を立何物に寄らす質に取り來年に至りうりさき候上割り返し可申候御家中切手も同様也然し只今貳百萬兩之札無之事故在中は先切手を出し置取りさき札之出來次第に引替れはいと安き事也左候えは官府にては人情之自然に隨ひ札をふり出し諸物をさばき何之心配もいらすして一國人心の信を取る事にて順風之上に帆を懸る勢也是等之所置定て河瀬心付も可有之何々一日も早く同人被呼寄得斗下情聞取に相成候様吳々御心配奉希候様々拜話も御座候へ共大略仕候以上

十二月十一日

小楠 拜

茶陽 先生

尙々近日之光景如何御知可被下候以上

全

一書拜呈仕候歳末愈御安康に被成御座珍重之至に奉存候此許相替り
不申御安意可被成候一躰之次第は虎之助殿長谷川一兩日に歸國何も
御承知可被成大略仕候

景光短刀御返し被下千萬忝く慥に拜受仕候此許短刀流行相應之物所
持不仕御庇にて間に合拜謝難申盡御座候代料正金百兩長谷川に附與
致候間御受取可被成下候大に取り紛此段迄大略申縮候以上

十二月廿七日

茶陽先生

小 楠 拜

尙々御全家様へ可然御傳へ可被下候龜之丞公も大に壯にて御安心可
被成候 小拙不快も寸斗快は無御座候委細は虎公へ御承知可被下候事
仁十郎に寄する書(安政五年)

六月十八日之御狀到着忝く致拜見候御兩家御尊長様方益御機嫌能奉

仁十郎は先生の
實弟なり永嶽氏
を嗣く此書は安
政五年始て越前
に聘せられ其年
春岳侯幕府の題
費を授けられし
時隨行の門生河
瀬典次をして歸
郷事情を知らせ
め續て通知せら
れたるなり

恐悅候隨而拙者無異に罷在り御安心可被下候然は此許大變に付典次
歸し當月三四日頃は到着と被存候何も夫々御承知と存候扱々意外之
大變は申迄も無之江戸表よりは追々飛脚參り探討之趣承り候へは中
將様御名因之彌益御盛にて御旗本大名家中は申に不及市中之者迄感
服致し無限之御高名と申事にて御尤千萬に奉存候將又京師大阪尤以
御名譽盛大之由流石に人心の靈妙不可壓事に御座候於中將様は殊之
外御恐敬にて御尤め以來は終日御上下にて御座間も與御座敷に御引
き移り八歳と十歳に相成候定府の子供兩人御側に被召置右兩人之讀
書手習等自身に御示教被成御讀書御詩作等にて御暮被成候江戸詰御
家中聊も申分無御座候近日此許御家老松平主馬出立致候筈にて是は
以來之御仕置筋等爾以是迄通りに不相替相勵候心得等御示教有之候
事と存候此許は去月十五日以來漸々人心居り合御家中町在共に此節
に至り別而御德義に奉服候是迄は却而御政事向に付ては色々申崩候

者も有之候え共誰之歌にや有る時はあるのすさみににかりし無きてぞ人は戀しかりけると申意にて今日に至り實に御誠心顯れ申候必竟は御隣藩加賀勝山鯖江等何も困窮よりして市在大惣之かりり物有之市在誠に困窮無限暴政にて既に金澤は當春黨民起りし上去月未に又々相起り四千人餘御城下許に押懸け豪商六軒一夜に打崩し申候其起り豪商之者共役人に賂を入れ米をべ買致し候に付而米價一時に沸騰致し候を憤り候事にて有之其末町奉行等の役人數人役さし除に相成候而漸く治り申候右之通り隣藩は散々之暴政之處此許はかりり物杯は一切無之のみならず御役人種々心を盡し賄賂等は末々之役人迄一切に嚴禁致し候位にて晝夜之かわりと申もの故今日に至り御德政相顯れ一統服從致し候御家中には中將様御直書被下細々被仰聞有之候上執政初諸有司志を合せ大に心配も致し候間人情大に居り合申候去月廿四日よりは一統平常通りに相心得候様達有之當日より文武

館替古も始り申候 拙者も十五日以來は晝夜心配致し執政を初諸有司萬事之相談之上明道館中役輩諸生晝夜來訪にて誠に困り入漸昨今聊間暇も得候間執政より沙汰にて御留川鮎漁に兩度も參り候位にて萬事御察可被下候 尤執政御役人は何と無く出漁等は相制し出浮不申拙者は別段と申事にて御座候借又執政初之申談此分にて鎮靜致し候時節にては無之本より又御政事改正杯致し候筋にては尙以無之今日は先づ間暇の時と申すものにて此時に於て後來萬事之筋急斗講究致し爾益自己銘々の知識心得を相究め後日の開運を相待可申と一統申談候間近日來は執政初中々勃興致し日夜講習前日より一段の盛大に相成り面白き勢に御座候拙者宅にて熊澤集義和書之會相始め執政諸有司其外も參り種々討論何時も鷄鳴迄は咄合申候憂愁中の樂事と何も悦申候

江戸表外國之事典次承知迄は畧致し英使至而尋常にてハルリス條約

之通りに相濟去月廿一日歸帆フランス不遠參り候筈なりハルリス日本に心を盡候は誠に無限之至り感じ入申候流石亞墨利加之國躰世界第一にて有之候魯英亞を初外國の事情は熊本にて見込候筋と少も相違無之候故略す

外國御奉行出來

是迄御勘定奉行

箱立奉行

下田奉行

御目附

田安御家老

永井玄蕃頭

堀織部正

井上信濃守

岩瀬肥後守

水野筑後守

此中井上を除け外は幕府中之人材何も中將様に心服此節一揆を立候に隨從之人々也夫故彦大老よりは大に惡まれ既に罰をも可蒙人々にて候へ共外國應對は此面々にて無之候へば一切出來不申に因て當分

此職に被命此後は如何成り行可申や難計事に御座候其外は相替り候儀無御座候先此段拜呈致し候以上

八月八日

仁十郎様

平四郎

向々典次も當月末には御許出立致し候事と被存來月半には委細御様子承り可申と大に相待申候以上

附紙

水府は老公御附迄引替へ候様被命將又太田丹波守鈴木石見守再び執政可被申付旨御沙汰有之此兩人は奸黨之大將なり當中納言公此節は存外の憤發にて兩奸被用候事嚴敷被相斷未だ落着は承り不申候何れ次の飛脚にて知れ可申候老公附安島彌次郎は當公附と成り何某と歎申者水戸より參り老公附と成り候由此ものは惡敷者にては無之と噂奉る尾張は下た地一致致さず田宮彌太郎専ら君公一味なり竹腰は君

公と別種なり此君臣相離れ候より色々之申分差起り居候處に此節の大變參り甚以六々敷有之候處成瀬當年十九歳大に議論を發し何も無事故相鎮田宮は隠居附と相成り候成瀬は後來頼み有る人物なり此許にては左様之混雜一切無之流石に君徳感心致候
 別啓御袋様些御中氣之段誠に以て笑止千萬何角御心配察入申候定而御一旦之事とは存じ候え共御病氣柄にて重々御氣遣敷存候
 御隠居様初可然御致聞被下度相願候
 御母様金子之御申越委細承知致し候此節差上申度處典次歸りに付一切無餘相成當月は殊之外貧困にて何れ來月は差上可申候此段付呈致し候

八月八日

仁十郎様

平四郎

再啓別紙泰吉牛右衛門に御序に御見せ可被下候

安政五年在越前
 中の書なり此時
 春岳侯を首しめ
 同志の諸公侯各
 體費を聚り其他
 有志知名の士多
 く誅宥せらる安
 んせしめんが爲
 めに懸通信せら
 れたるものなり

宿許に寄する書(安政五年)

六月十日之御狀相達難有拜見仕候

先以奉始

御母様益御機嫌能奉恐悅候隨而私儀相替り不申壯健に罷在申候間御安心可被下候然者此許大變に付而は典次罷歸り二三日内には着仕り可申委細御承知可被成誠に非常之大變に御座候え共御家中町在共に入情惣て居り合候間少も氣遣は無御座さすがに明君の御徳義と感心仕候就ては私事晝夜彼是と心配仕近日漸々間日を得既に一昨日は南川と申御留川に鮎漁に參り近日の鬱散仕候是も重役の而々より頻に勤めにて罷越候事に御座候江戸よりも追々飛脚到着にて様子承り候えば此節之事にて天下之心隔以中將様に歸服任中々御令名きびしき事にて迎も長く此通りにては決して濟み不申何れ不遠御開運可有御座候必定之御事と奉察候

當年御暮方之儀は典次に委細申聞候間御承知可被成略仕候此節は替り申儀も無御座候此段迄申上候以上

七月廿九日

横井平四郎

御母様

至誠院様

あつせどの
おつせどの

尙々此紙面は典次御許出立後に着仕り可申候典次歸りに御土産可被下夫のみ相待申候何れ九月節旬前後と相考何も承り可申と大に相樂み罷在候

宿本に贈る書文久元年江戸

文久元年春岳侯
江戸府邸に在て
先生を招請す乃

追而拜呈仕候此許出立之儀來月十五日十に八九は相決し候様前書に申上候處昨日兩君も得斗御許容被成一兩日中に福井表に被仰越候筈

ち越前より東上
留在中の家書な
り此行只春岳侯
他の講學のみにて
他に事無し困て
此一簡を載し餘
は略す

に落着仕候左候得は彌以十五日に出立可仕其内御飛脚に尙可申上候え共一日も早く相知れ居候儀よろしく其御心得にて普請等何も御心配成被下度奉存候馬は何分歸り前に御引き入れ歸り之節左平太乗り候而迎に参り候様吳々奉存候敬之助市太郎列に早々御頼み可被成置候最早此許へ罷在候事も四十日許に相成り何角いそがしく用意等仕候

向の貞作屋敷にて地方少々御かり受被成大根又は京な唐茗之類御うえ付被成虫に食せ申さぬ様御世話可被成候尤一日も早くうえ候儀よろしく歸郷之上の樂に御座候

純三郎に申談し置候門は丈夫成る材木にてうちぬぎのぬれ門に可被成候

小倉路いたし候えは毎之通り熊本の様に参り候事にて坪井出府所に着いたし度事に御座候いまた何もふどゝのひに候えは小川に立寄り

可申何方たり共早く知れ居不申候てはうへ木にて人馬之とけ間違
ひ可申候此紙而着之上御返事福井表に御仕出し可被下候自然は又大
坂より鶴崎に船便都合御座候えはめつらしく豊後路を可仕哉左候え
は大津より直に沼山津に着可仕候是は十に一つにて御座候來月出立
仕候えは此節は北陸道を通仕等にて名にのみ聞え親不知子不知杯
の名所をも見信州越後越中加賀等の國々九州者之いまた見不申所々
見物仕候東海道よりは兩三日日數懸り候間九月朔日か二日に福井に
着可仕候扱九月中滞在十月初は必定福井うち立同月末には歸着可仕
と大に相樂申候
にござり酒は随分澤山に御作り込み被成度萬々奉存候此段迄追啓仕候
已上

七月四日

至 誠 院 様

横井平四郎

あ つ せ 殿

一追啓此紙而着いたし御返事は懸合中間敷福井には九月中は到留仕
候間一應之御紙面は彼表に御遣可被下候夫も八月半頃よりは懸合申
間敷候
八月十五日頃の出立は十に九ッは相違仕間敷其御心得可被下候尙又
盆前後には決定之事可申上候歸郷に打立候えは百日餘之日も却而待
遠に相成り日々指をおり申候
江口純三郎にたいくす壹斗程用意いたし吳候様御申遣可被下候歸
りのち注文は時候におくれ可申候只今より御失念無く被仰越被下度
候
牛右衛門此許に出府いたし候よし何れ此節は逢ひ不申ものと被存候
是も程々物入多く其上不案内にて金子も相應に持参いたし不申候由
にて極困窮いたし借用申遣候間貳拾兩遣し申候彼是にてよ程いり申

文久二年夏春
侯府の惣裁職
の命を受け再び
先生を招聘せり
先生留在中幕府
に登用の議有り
先生断然之れを
辭す此書蓋し當
時の事なり

候え共不足は仕り不申候此段迄退啓申上候

三日

宿本へ贈る書(文久二年江戸)

一書拜呈仕候秋冷に罷成り増御機嫌能奉恐悦候私相替り不申外大平
泰吉以下何も申分無御座罷在申候間御安心可被成候此頃は漸々秋冷
相催し朝杯は羽織も懸け申位にて暮し能夫故あしき流行病も漸々静
まり大分心よく罷成り申候御許よりは御書狀一切着不仕如何に御暮
し被成候哉はしか并ころり之流行朝夕あんし申上候
昨日嘉悦より七月廿四日認之書狀到着初而野山津相替り不申候段承
り責而安心仕候最早夫よりも四十日程に相成り一切御狀着いたし不
申如何之次第に候哉と思ひやり参らせ候何れ次之飛脚にて必々参り
可申候此許日夜多用は相替り不申中々非常之折柄にて格別心配仕事
に御座候御側衆大御目附初御役方追々咄合等誠に寸暇無御座候其外

御老中へも罷出申事に御座候此頃は幕庭へ被召出候筈に御議定に相
成春嶽公丁度御引入にて有之候間大議定御窺に大御目附被罷出候處
其前に様子ほのかに相聞え居候間必死に御断申上候覺悟之次第春嶽
公に申上置候間大御目附へ十分御断に相成此上にも是非共召出候事
に候えは横井は嚴斗覺悟罷在候段迄御咄合に相成候間廟堂上にても
重々尤之筋と却而感心に相成候趣にて此一件は存念通りに治り候而
先安心仕候
大平も洋書調所に英學修行に日々参り大に競ひ申候同人より委細は
申上候と被存候
出立前あつせより注文之きぬ糸并針遣し申候
新宅かべぬり等定而出来いたし二階物置も恰好よろしく色々之物も
治り候事と被存候最早稻も少々は黄色に相成り秋之景色思ひやり申
候此許にては秋の野は申に不及青色之物さへ見候事叶ひ不申夜分酒

給候折は泰吉杯御許之事のみ咄し出し申候御許に居候えはかんしやくも起り無理も申候え共密中にては唯々やともどゆかしく思ひやり候事のみ有之誠に困窮の至りに御座候
朝夕の給物には誠に困入申候先便にも申上候あそりのり早々御遣し可被下候外にあふらめも時候にて御遣し奉希候
來年夏にも相成り候えは是非々々歸國いたし候覺悟にて彌以沼山津永住之心得に御座候間漸々修覆等御世話可被成下候金子も小野殿歸り又は當冬迄に五十兩程さし上可申夫にて不足いたし候えは尙さし上可申候何分御世話之程奉希候
出立前申上候通り梅の木の方は西屋敷之道に御直し不足分は何方よりも御求随分多分に御うへ被成其花の頃は罷在り見可申と相樂申候至誠院機御帶地は小野殿歸にさし上可申候
火事羽織先便に申上候通り定而御廻しに相成候と被存候先此段迄申

上候已上

後

八月八日認

横井平四郎

至誠院様

左平太殿

あつせ殿

尙々時分柄御自愛可被成候泰吉先日來ころり相煩一旦よ程氣遣いたし候得共都合よろしく快く相成申候兎角旅中病人には困り入申候御許如何と案し申候小法主も彌以元氣よろしく飛ひあるき可申候何も後便に可申上候已上

宿許に送る書

一書奉呈仕候秋冷之砌益御機嫌能奉恐悦候隨而此許には私初大平以下何も相替り不申御安心可被下候然處私事去十五日朝より暴瀉相催

幕府既に先生
登川の命を固辭
するを聞き一時
細川家より借用
の再議あり先生
大病後未だ本に
復せず其事情の
詳悉を得ざる時
の書なり

し晝頃に至りひた／＼とあしく相成り暮前よりは人事もわきまへ不
申下しはやみ不申誠に危とく之容躰に御座候處早速手廻しよろしく
公義之御醫者西洋家は太抵皆々打寄評議之上治療いたし候故歎其夜
之半頃より下しとまり候而ぬいり申夜明け候えは何とやらん人ど心
地も付き申候而何れも大いきをつき悦申候其後は次第によろしく日
々元氣も付申候え共死病之活き上り候事故年も寄り候えは若者之様
にも參り不申今日迄も牀上げ出来不申候昨日共よりは食事過き候に
大に迷惑仕候泰吉快復後五六日より之事にて御座候何れ五六日も過
き候えは外出も出来可申少も御氣遣被下間敷候
小川方散々此節迄は書状仕出し得不申よろしく御傳へ可被下候
あつせ小法主はじか相濟み大に安心いたし候
此許御改革追々被仰出誠に非常之御事に御座候就而は私事非常之御
用にて先便にも申上候通り一橋様初御老中方きつと御頼に被思召之

事にて此節之病氣早速相聞え候や否所々より御醫者等さし越され御
見舞等御座候就中於御城は
上様より春嶽様迄追々容躰御尋被遊誠に以非常出格類例等も無御座
候事にて難有内深く恐入奉存候必竟右之通り之冥加もの故如此死病
もいき上り候事と被存候
私事被召出候儀御断申上候事は先便に申上候通りに御座候處病氣之
前又々模様打替り根より御こぎ上げは御無理にて御用中當分御當家
より御借り受被成候筈にて丁度只今越前より御借受同様之御取あつ
かひと申御内意御座候是なれば御断も出来不申一と先罷出不申而は
難叶次第と相心得申則委細龍の口御家老手許に申入置候間此節之御
便には御許にも申越候事と被存候然し病氣後は何事も春嶽様より御
遠慮にて御申聞無御座候間此節如何成り行候哉承知不仕候い才は次
之御便には相分り可申候

元田も家内死後宿本無餘義さし支にて願下り仕候何れ來月七日頃は此許出立可仕候同人歸國にて不遠御承知可被成候此節は急やどひにて此段迄申上候餘は後便に可申上候也

後

八月廿五日

横井平四郎

至誠院様

左平太殿

おつせ殿

尙々此許此秋は雨計にてとんと晴れ不申迷惑仕候御國許如何定而御同斷歟と被存候時分柄御自愛專一に奉存候也

宿本へ贈る書

元田十五日出立仕候に付一筆奉呈候よ程秋冷に罷成り益御機嫌よく可被成御入恐悦に奉存候私も病後次第に快罷成り不遠内には出勤も

幕府の聘請を全
く辭し得たるこ
きの書なり
先生當時の進退
他に記せし者無
し但此三冊の家
書のみ其襟櫃酒
然たるの迹を見
るべし
他二三の家書有
り其情緒を繰述
せしに過ぎざる
を以て載録せず

仕候間御安心可被下候先つ者小野殿御歸國にて此許の様子い才御承知可被成又元田歸り候而其後相替り不申儀は御聞き被下候間格別申上候儀も無御座候
私御やどひの事病後早々も被仰付候御模様は御座候處此頃尙又達して御断申上候えは御聞入れに相成り當分安心仕候其外此許之様子はい才元田より御聞可被成候間何も略仕候近日少しく快く相成候えは來客やら何やら不相替多用にて病後元氣にも差障り可成丈相断候え共無餘義用事杯誠に困り入申候乍去漸々快く御座候間少も御氣遣は被成間敷候御許ころりも定而静り候事と被存候此許も近頃は太に治り何の沙汰も無御座沼山津は度ごとに入り込み不申當年も同様と被存候誠に仕合成る事に御座候昨日は村祭りにて來客も御座候夜前泰吉杯と咄し合申敬之助列今朝迄も給居可申候壽か手製之酒も出來りたし今朝はかすにと奉存候

元田に金子三十兩借申當冬來春迄に返し候筈にて御聞置被成候様奉
存候御藏札手許に参り差上申候間當冬根段よろしく御座候えは御拂
可被成候十三石借も御許にて御受取可被成候此節荻頼のたばこ入り
せる遣し代錢三兩壹歩餘にて留守に遣し候様申遣候間御受取可被成
候當冬は色々様々之物入多く金子御下し申上候事些六ヶ敷右之分に
て御仕舞被成度奉存候乍然不足も仕候えは日向屋に御相談可被成候
猶は定而さき申たるにて可有御座候如何やと思ひやり申候最早秋も
くれ新宅之景色かり田新雁之聲杯いか計りと被存候此許にては日々
物見より通りをなかも申候外何も樂しみ無御座誠に困り入申候新宅
二階上ぬりは定而出來仕候と被存候出府所も少は御手入被成では叶
ひ間敷廊下杯もりもいたし候間かわらきせ不申所は瓦を御かけ被成
候方可然哉其外は來春に何も御延し被成候様奉存候來春に相成候え
は此許の模様も打替り可申哉其上にて普請等はともかくも仕り可申

何も左様に御聞置可被成候先此段迄申上候い才は元田より可申上候
已上

九月十日

横井平四郎

至誠院様

左平太殿

あつせ殿

尙々時分柄御自愛可被成候左平太は嘉悦に出府誓古かま出し候と被
存候留守はさそく御さひしく御暮し可被成又法主彌盛長申分も無
御座悦入申候大平は日々洋書志らべ所に参りかま出し申候
友岡彌三死去誠にいたわしき事に御座候私出立之節見舞候處よ程之
容躰とても六ヶ敷と被存金杯遣し申跡之處熊四郎氣遣しく定而久右
衛門世話仕候事と被存候此節御叔母様より熊四郎外出之儀起り可申
決して不相成様に久右衛門に御咄し可被成候小川清心院様は定而御

以下七通の家書
は文久三年既に
江戸より越前に
返り同藩在留中
の書なり時に天
下の形勢朝暮變
轉し暇々騒亂に
起し信書固り簡
畧事細詳なら
ずさ雖も亦以て
漸次時勢の危迫
なるを想像する
に足る

甘快被成候と被存候源太後妻一日も迎ひ不申候而は難叶とふそ程能
人躰御座候えかしと被存候何方へもよろしく御申傳へ可被下候已上
宿本へ送る書

一書拜呈仕候春寒之砌被爲成御崩益御機嫌能奉恐悦候隨而私初何も
相替り不申壯健に罷在候間御安心可被成下候此許不相替多用にて日
夜來客にて困り入申候春嶽様去る廿三日に御發帆に相成定而昨今は
大坂に御着と被存候容堂様も廿五日に京師御着と承り申候京師の御
模様も大に御都合よろしく青蓮宮様御還俗被仰出鷹司様關白職近衛
様御願にて關白職は御免にて内覽如元被仰出此の御三方御同心にて
關東の事情御承知被成專御配慮被成候間一橋様と萬端御相談何も大
に御都合よろしく春嶽様御上京を御待被成候事に御座候春嶽様も今
頃は太坂御着來月朔日頃には御上京可成存候得は何も治り可申重々
恐悦被存候

公方様は來月末に御上路にて此節は決て相違有御座間敷去春以來之
様々の禍亂も平治いたし可申候其上にて諸侯御引立日本國中一致之
上大に御興隆被成候御都合にて是よりは又重々御大事にて御座候京
師にて 良之助様御評判大に御よろしく
太守様も御出京にて春嶽様御上京を御待萬端御相談被遊候思召に有
之誠に恐悦に被存候三岡しわすより京師に相出大坂にて牛右衛門に
出會いたし急用にて四五日前に福井に歸り明日又々此許發足京師に
參り申候元田杯へも寛りと咄合申候牛右衛門に御托しの品物も儘に
受取申候金子五十兩三岡に托し上申候何れ元田畝右田才助に頼
みかわせにいたし候筈に御座候間御勘定所御聞合御受取可被成候私
身分も春嶽様御上京之上御直談にていつれとも決し可申何れ不遠相
分り次第大平泰吉を歸し候心得に罷在申候先此段迄申上度餘は後便
に譲り申候以上

正月廿八日

横井平四郎

尙々御許春寒何程に御座候哉此許雪も消へ一旦は和暖に御座候處一
 兩日又々寒氣に相成申候然し最早さしたる事は無御座候又法主小ひ
 く日に増成長仕り可申候何ぞ遣し度候え共此節は出來不申何れ後
 便に遣し可申候何方にも書狀仕出不申候よろしく御傳へ可被下候以
 上

別啓申上候私身分の事先便にも極密に申上候通り春嶽様初此許一統
 是非被召寄候思召にて有之且諸藩の有志よりも同様之申立之由何れ
 御直談之上落着可仕候京師に罷在候様に相成候歟も知れ不申候え共
 夫て者心痛之次第も有之何れ今暫は此許に滞留春嶽様江戸に御引取
 之上又々江戸に罷出候様に相成り候事歟と被存候然し諸藩之有志連
 中よりは是非京師に引き出し候存念にて追々懸け合有之候趣京師よ
 り申來候何分御直談にてとふとも決し可申此段内密申上候事

同前

宿許に送る書

一書奉呈仕候春暖に罷成益御機嫌よく奉恐悅候隨而私相替り不申御
 安心可被下候扱左平太源次郎當月三日に此表に到着い才御許之御様
 子承り大に安心仕候右出立に付而は何角之御心配被爲成忝く然しよ
 くこそ参り候事に御座候此許一轉相替り不申中將様蒸氣船より大坂
 御着去る四日に御上京にて御座候越前守様去る十日に此許御發駕御
 家老兩人御前後に御供大分之大勢にて御上京に御座候夫故御留守は
 御役人迄も極々すくなく罷成申候

將軍様も當月二十一日に蒸氣船より江戸御發帆に相極り申し候京師
 之御模様は誠に御都合御宜敷何事も首尾よく治り重々恐悅に奉存候
 然し

將軍様御歸城之上は日本國中御引き起し御改正之新政被行申等にて
 夫等之御相談は種々被爲在候御事に奉存候先一件は治平に相成り申

私身分も京師にて早速
 太守様へ御懸合に相成候何角御相談中と申來候先便にも略内密申上
 候通り諸藩よりも中立此儘にて罷在候儀は出來申間敷自然は早速京
 師へも罷出候様に相成候儀も難計との事情と承り申候就而は私身分
 は春嶽様に御まかせ置候事にて何も存念は無御座候を共可成事に候
 えは今暫は此儘に罷在り候方重々念願にて左候えは寛りと大病後之
 保養も仕り度段内意申達置候然しとふ相成可申哉非常之時節にて何
 どもはかられ不申何れ不遠御さし圖可有御座候源次郎左平太平泰
 吉は夫迄は此許にさし置御模様にて困り候而御國に歸し可申候
 先便申上候通り金子五十兩かわせにてさし上申候左平太列參候に付
 而九郎右衛門方殊之外心配いたされ候段且金子もかし被申厚情之至
 りに御座候右五十兩の内より御返し被成度奉存候不足いたし候えは
 追々御廻し可申候尤古京町へは書狀敬之助に頼み仕出し置申候此節

は殊の外多用にて先此段拜呈仕候以上

二月七日

横井平四郎

至 誠 院 様
お つ せ 殿

尙々追日春暖に相成暮し能御座候御地は最早十分の春色想像仕候左
 平太共參り候てはさそく御淋敷御暮し被成候と奉存候此許はにき
 く敷不思議成る世の中と存申候又法主小ひくに殊之外盛長いたし
 候由左平太留守にては又法主こひしかり可申後便には何ぞ遣し可申
 候此節も何方へも書狀仕出し得不申可然御傳可被下候也

宿本に贈る書

一書拜呈仕候春暖に相成益御機嫌よく奉恐悦候此許未々迄相替り不
 申御安心可被下候然者京師之事情殊之外六ヶ敷春嶽様思召通參不申
 甚以氣之毒成御事に相成申候

同前

將軍様四日に御京着此未如何参り可申哉何れ一兩日には御模様分り候事にて實々心痛千萬に御座候いきりすより三條之申出御取り上げ無之候えは直様大坂へ乗り込候歟薩州へ仕懸候歟二ツ之間にて誠に無謀成る事に落入申候い才は敬之助へ申遣候間同人より御承知可被成候右之通り之次第にて京師より申越候筋によりては源次郎泰吉之兩人は急に歸し候筈に御座候とふそくよろしき様に相成申候えかしと禱申候

清右衛門熊本に参り候間金子貳拾五兩さし上申候定而色々物入も可有御座候自然大亂にも相成候えは沼山津御住居は氣遣しく御座候間敬之助方に御同居被成候様奉存候沼山津之屋敷は岩男にでも又左門門にでも御あつけよろしき様御世話被成候方に奉存候

越前守様も一昨日御着にて様々御相談仕候此許は上下一統一致いたし何之申分も無御座誠に安心に御座候用金も貳拾萬兩程も有之萬一

三月九日

至 誠 院 様

お つ せ 殿

亂に相成候而も都合よろしく日々申談仕候是非共亂はしづめ候覺悟にて御安心可被下候様々申上度事御座候え共殊之外取紛此段迄呈上仕候何も後便に可申上候以上

宿本へ贈る書

追而拜呈仕候今日京師より飛脚着將軍様も六日に御参内相濟候え共御一致之處へは参り不申此先き如何と深くおんろふ仕候いきりす之様子はいまた分り不申候え共申出

之三條共に御斷切之上一切拒絶に相成候えは必定大坂に押懸候歟薩
州へ出懸け可申候何にしても戦争近々に相成り候勢に有之候唯々禱
り候處は京師關東御一致に御成り被成候えは外國どふとも御都合出
來可仕誠に痛心之至に御座候
二月十日書狀今日到着何も御さし障不被在小兒迄無事壯健珍重此事
に奉存候

藤崎御守儘に受取あられ并からかは愈早速調へ申候敬之助も上京と
申事馬淵方より申來何れ十五日頃迄には到着と奉存申候左候えは源
次郎早速遣し可申候此段京師之模様因りては泰吉を歸し候事に相
談仕置候私事は當分は歸國とても出來不申候日夜心配のみに罷在候
此許より書狀追々仕出し一向に着いたし不申候段さそく何角御案
勞可被成候最早書狀は六七度も仕出し置申候其内二月初に金子五拾
兩京都にて替せ取り組さし出申候定而夫々相達候事と奉存候此節二

十五兩清右衛門よりさし上申候間是にて當分は御さし支無御座候事
と奉存候萬一亂れに相成候えは敬之助方に御同居被成候方重々可然
早々御引出可被成候乍然御引出等にて金子不足仕候えは日向屋に御
相談被成清右衛門ぬの代より御かり受可被成其段しつかりと御申越
に相成候得は此許にて竹内方には仕向け可申金子之儀は少も御遠慮
有御座間敷奉存候此段迄追啓仕候

三月十日

横井平四郎

至誠院様

あつせ殿

尚々外へ書狀仕出不申候何方へも可然御傳へ可被下候也

宿本に贈る書

一書拜呈仕候益御機嫌能奉恐悦候此許相替り不申御安心可被下候然
は京師御所置彌以外国御拒絶に相決し誠に恐入被存候春嶽様へは御

役御断にて明廿一日に京師御發駕と只今申來り候に付只今より源治郎泰吉を京師に大早にて遣し私存念を小野殿敬之助迄申達し候源治郎は直に御國へ歸し候筈にて泰吉は引返し候事に御座候源治郎不遠歸郷可仕委細は御承知可被成候左平太太平は今暫此許に留置申候竹内手代も來月初には熊本に到着可仕金子もかわせとして貳拾五兩さし上申候間手代より御受取可被成候此許にては一統一致いたし町在迄も少しも異議無御座候事も能々行届き此折柄少しも氣遣無御座候も御安心可被下候勇姫様も來る廿三日には御到着之御積にて御座候唯々日々執政初寄合咄し合夫にひま無御座候何にいたし非常之時節がひぶんを盡し不申ては難叶事にて誠に心配のみに御座候先便追々申上候通り萬一亂にも相成候事御許に聞え候えは直様敬之助方に御同居被成候方重々可然奉存候左平太太平は大に心も付き此節は一段上り申候朝晩咄合大分了簡も

付き大に悦び申候先此段迄餘は後便に可申上候也

三月廿日

横井平四郎

至 誠 院 様

あ つ せ 殿

尙々時分柄御自愛專一に奉存候又法主小ひくに彌以盛長いたし大慶仕候何方へもよろしく御傳可被下候也

宿本へ贈る書

太右衛門宿本さし支にて歸郷いたし申候間一筆拜呈仕候向暑之砌益御機嫌よく奉恐悦候私も相替不申無事に罷在候御安心可被下候十一日之御狀先日到着拜見仕候左平太兄弟引返之義六ヶ敷趣社中よりもい才申参り無餘儀次第にて當分留守番にて罷在候而よろしく又よき都合も可有之其節出懸候而可然奉存候京師の事情嘉悦列に委細申越候間此に畧仕候種々様々之世の中誠に

心痛之至にて一向によろしき勢は相見え不申候え共又昨今に軍に相成候事ども見え不申何分心力を盡し候覺悟迄にて御座候
 中將様御咎も去る十五日に御免に相成り申候色々御相談等にて不相替ひま無に暮申候段々御改革に相成り當君講武所杯に御出之御供も御先に歩立兩人御小姓兩人御小姓頭も壹人外に兩三人にて御挽槍一本御茶御辨當も無之稽古塲之あり合の茶にても水にても召上りに相成申候尤御乗切にて御座候是よりは在中へも近々御出にて庄屋頭百姓位御直に御呼出にて民間の事情御聞被成候事に御座候此一事にて一昧うち替り申候先一統人心も靜にて御座候
 七月は普光院様御三十三回誠に向角思ひ出申候何やら歎やら品物御送被下いまた船より上り不申他に此許にても茶を上げ可申候
 左平太兄弟歸り候ては又法主さそく悦ひ可申候加賀落厂遣し申大悦ひと存申候

江口歎山田宮川歎とふ歎參り候様に申越如何に成り行申たる哉相待居申候

内藤も京師より被呼出する七日に此許出立仕候同人への御狀は私開封拜見仕候隣家水野へ直に見せ申此許女へおつせより書狀殊之外難有則返書さし出申候此女つちは誠まことに無事成る者にて唯助共に對してもあしく無御座候大仕合にて御座候太右衛門に御聞可被成候
 藤崎御守階に受取申候此節は外に相替り候儀も無御座候此段迄拜呈仕候何も追々可申上候以上

五月廿四日

横井平四郎

至誠院様

おつせ殿

尚々何方へもよろしく御傳へ可被下候時分柄御自愛專一に奉存候私
 も病後次第に全快御安心可被下候小ひくに盛長申分も無御座悦入申

候以上

宿本へ贈る書

一書拜呈仕候烈暑之砌益御機嫌よく奉恐悦候私も相替不申御安心可
 被下候江口列去る九日に京着江口一人一昨夜此許に参り御許事情い
 才承申候一躰相替不申段先、珍重に奉存候此許之儀先便嘉悦列迄追
 々申遣し御承知被成候と奉存候
 將軍様去る十三日大阪より御船にて御歸城に相成申候是は江戸御役
 方一致いたし是非く關東に御歸り其上にて大權を御さし上關八州
 御保守被成候事情に相違有御座間敷候是にて京師關東御手切に相成
 り扱々笑止千萬に奉存候
 長州より戦争相始五日迄之様子申参り散々之敗北絶言語申候とても
 戦争と成り彼等に敵對出來可申様無之事は明白成る事にて夫を聊も
 合點いたさず無理無謀之攘夷拒絕之打立は長州専ら主張いたし如此

之動亂に相成り日本國中之大困窮をかもし申候長州之罪國を亡し候
 も當然に御座候諸藩より援兵さし出候様勅旨も出候え共誰あつて應
 し候もの有御座間敷候長州より國事掛り之御方に罷出敗北之次第申
 達し諸藩援兵至急にさし出候様尙御催促被仰出候處左様出來不申候
 えは講和之降 勅被仰出度段申出候由只今に至り夕様之申出言語同
 斷論も評も無御座候長州敗北にて京師之暴論者も大に恐懼之色を顯
 し候由扱此許にては兩君御上京相決し御役人京師に被差立置彼許之
 摸様に應し直様御出懸け大議論御立て暴論御取り静めに相成る覺悟
 にて四五日以前に御番士一手は被差立其外御役人も一兩日中より追
 々出立仕候長州今一と敗北に至り候えは手も無く治り可申候大に仕
 合に相成申候

此節長州に出懸け候英佛之軍艦は横濱に居りし船にてかわるく押
 懸け申候事に御座候勿論多分も無之事にて毎も二艘位にて御座候彼

等にては日本之事情能々承知いたし長州さへうちひしき候えは日本國中は忽に開國に相成候儀も深く合點之上にて候え共無名に一計を仕懸け候儀は相成不申是迄さし控へ居候様子に有之候然處先月初長州より商賣船に鐵砲打懸け候を聞候而大に悦ひ其より取り懸け申候尤いまだ本國へも知せ申いとま無之横濱有り合少々之軍艦にて最易く仕附け申候まして本國より軍艦も参り候えは何も無論事に御座候去る十四日にイキリス軍艦一艘大阪港に乗り入石炭所望いたし候是は長州より歸り之船にて可有御座候大阪之模様見に参り候ものと被存候

京師之事情は山田列より社中へ申越候事に被存候間畧す
私身分御國許論評等い才江口より承り御知行さし上候事宜敷候えは其御許にてとふともこふとも可然御取計被下候様奉存候尤久右衛門列へも此節申越候間夫等之手數遠方御懸合には決して及ひ不申跡に

て御知せ被成候えは何もよろしく御座候事

此段迄申上度何れ當月末迄には私も上京と覺悟いたし罷在候何も後便に可申上候頓首拜

六月十七日

横井平四郎

至誠院様

左平太殿

大平殿

おつせ殿

尙々當夏は格別に暑甚敷近は九十六度に至り候事も御座候御許も御同様と被存候又法主小ひくに不相替元氣よろしく罷在候と被存候唐もめんにて黒染にいたし清水こふやに申附置不遠出來可仕候至誠院様坂口御袋おいつおつせ并に壽加唯助妻に差上候心得に御座候事

兄弟へ與る書

兄弟は左平太
平の二姫を云
姪に與る書敷
あり然れども
時及勝氏の門
遊ぶ中の書は
一應の論戒は
情を通するに
載録して其他
畧す

其許洋學館幕吏聚斂切々心外に候乍然是等ありまへ之事可驚事にあ
らす他に拘らす可成丈心力を盡し修行可被致候他の非をのみ唱へ我
が修行おこたり候は士君子の可耻事也志さへ厚く候えは木石をも動
かし申候目前之變態聊心に被懸間敷何も扱置き一身之修行第一にて
後來皇國中興之御用に相立可申候外何も無用之閑是非也能々可被心
得候此段迄申遣候已上

六月十五日

小

楠

兄弟當

尙々諸君へ可然願申候伊達より書狀參り返書仕出し得不申宜敷申傳
可給候
唐菜種早速うえ可申候當夏は雨計にて田畑共に惡敷庭前沖之田は度
々之出水にて半毛も取れ申間敷四五日來晴に相成とふぞ續き候えか
しと存候

至誠院様久しく坂口に御出之處今夕御歸に相成候不遠寺倉歸りに何
も承り可申候也
追而膳所御とまり之節逆謀之者露顯同家中にて六七人程被召捕外に
水戸者一人本國寺にふみ込み召し捕候由此者共申出同類二百人餘も
有之段此段申來る未如何

左平太へ與る書

西洋渡存念之由尤に存候然し被申越候通り通辨且は彼の文字一と通
者出來不申候而は無益に候えは何もさし置十分修行專一に存候直傳
習も出來候えは誠に致大慶候且又天下之事も總て變態のみにて今日
之凶は明日之吉と相成明年中には如何變態可致哉何も其時之所置に
て只今よりとふども不被申唯々當然之修行重々祈申候事

八月廿七日

小

楠

左平太殿

二越米國渡航後
の信書なり故に
再征の末路長州
の事情小倉君臣
の落去等其他當
時長勢の一斑を
報道せしものな

兄弟へ與る書

一書申遣候海上彌安全珍重に存候留守中至誠院様始小兒に至る迄何
もさし障無之無事平安にて安心可被致候當月中には着港と被存如何
之おち付やと想像いたし候渡海中喜望峯は勿論風濤烈敷所も可有之
或寒暑之替り等意外之事のみと存候扱此許征長之一件藝州口より事
始にて先手柳原井伊手散々之敗軍紀州は聊もちこらへ候位にて有之
石州は津和野濱田落城長州中々一致にて強大之勢に相成候小倉は小
笠原閣老參着にて諸藩へ頻に出兵催促候處一向に應し不申御國并久
留米柳川迄人數さし出に相成り尤御國は港口監物殿兩手也久留米柳
川は申譯之爲めに少々の人數也其外は何方も出し不申先月初長より
押渡り田浦之臺塲に責懸り小倉方一戦に敗奔其後大里に取り懸候上
に又小倉敗軍也先月廿七日御國備塲に責懸り候處朝六半頃より之戰
にて七ッ過に終り四ヶ所之戰爭總て御國方打勝三百人餘もち取此

方には討死七人手負十人餘に過ぎ不申中々非常之はたらき驚入申候
尤此節は下津隠居監物殿付き添被仰付防戦之手配り等大に宜敷二手
惣懸りにはたらき申候然處諸方應援は一切無之御國一手にて遂にも
ちこらへ出來へき様無之此勝を鹽合として笠閣老に及論判晦日朔日
に二手引揚げ八日九日に惣軍歸城之筈に候尤此議は熊本に於ても澄
之助様貞之助様惣軍御引揚之御議論にて政府中も一決二日に木村徳
太郎御使にて大早にて被差立候處南歸にて監物殿より之大早に出會
兩方符節を合せ誠に恐悦々々小笠原閣老は朔日に軍艦より大阪に歸
りに相成候小倉は同日外郭盡く自燒はだか城に成し家中必死之覺悟
にて籠城いたし居候小倉君侯は去年死去にて御嫡豊千代殿と申てい
また幼弱右豊千代殿與方女子三人并家中家内子供總て六百餘人御國
にたより監物殿一同に被罷越山鹿より引き分れ内牧御茶屋に御介抱
に相成筈に候右之次第にて長州彌強大之勢に乘し不遠上京之打立

たし既に蕤州へは路を借り候書状も差付け候様に相聞え是は扱置將軍家先月中旬御薨去に相成御跡を相續一橋公に御内命之處一切御請無之強て御斷と承り如何落着いたし可申哉非常之大難事一時にさし起り誠に危急切迫之至に候全躰征長を專に主張いたし候は會津尤甚敷關老にては小笠原侯にて有之薩より申出候は天下之大事を誤り候は會津にて有之と顯然さし付候程にて今日と相成り大困窮に落入候越老公并勝先生も出阪に相成り職勝は歸專盡力有之一橋公は定て御内存有之而之御斷と相見え幕威を主張之面々盡く御退斥橋公御請に相成正議相立候えは薩は申に不及長も伏従いたし候に相違無之左無之候えは幕は是切にて皇國割據分裂誠にいたし方無き勢に落着可致候御國よりは近日に御使者被差立御國議被仰上筈に候御國議之所は拙者献白之通り兩公子思召に相叶政府俗議盡く御論被に相成り誠に感心之至に御座候

先月中旬澄之助様御養子に被仰出良之助様御政事御上聞被仰出候一統誠に難有恐悦々々澄之助様御議論甚堅確實に案外之御模様良之助様と始終御一致聊御隔り無之尤時ありて御議論は合ひ兼候え其終に一に歸し政府是迄之因循御破り被成漸々政府中も好き都合に參り申候是迄薩に疑惑甚敷候處良之助様より薩に何之疑惑歟可有之若し疑惑之節有之候えは御聞可被成と政府中に被仰出又は京阪探鑿方會津一方に相成り甚不宜必學校よりのみさし出申間敷杯被仰出且又御國人物も十分御承知御二方様共御聰明恐悦々々御二方様蒸氣船追々御乘廻し被遊長崎迄も御出にて良之助様思召は御自身ヨッロツバアマリカへも御出可被遊中々傑然たる御模様也海軍にて無之而は不相成筋も能々御了解にて軍艦御買上も頻に御催促之由將又交易も外國に乗り出之思召也何様監物殿初明日明後日は歸城にて其上は御軍制一變可致候虎之助殿も監物殿養子に被相成御家老見習被仰付此人大に

聰明大慶いたし候先日溝口孤雲隠居御家老再勤被仰付珍重々々唯々
 残念成るは政府中道家一人外に可然もの無之是も漸々どふとも相成
 可申右之次第にて御國は中々興起いたし候に相違無之重々大慶に候
 一外國交易且修行として諸藩より罷越候儀兄弟出帆後無程幕より御
 免達に相成候尤幕に相届罷越候様との事也

一當月中には到着可被致候其上は早速書狀仕出可被申候書狀參り候
 えは政府にさし出し候筈に付アメリカにて日本之評判等其他アメリカ
 政事之様子且風俗等何に寄らす悉敷認め可被申候尤此節熊本之様子
 申越候に付而はよしあし政府之事は別紙に認め遣し可給候尤兄弟之
 落付且修行之都合等は本紙に認め可被申候唯々政府之事は遠慮之事
 一小倉之戰爭平野拒馬臺大に勝利を得申候長崎方本道より押懸り候
 間追々と引受操り廻し々々々々打立候て此手にて二百人程もうち取
 候様子に相聞え是迄西洋炮は專遠敵を打候ものにて玉目も大きく操

り廻し輕便に無之日本流之陸戦には場所に寄りては却而コバ臺行軍
 杯よろしくと被存候尤永嶺手はポットにて勝利を得申候是は谷を隔
 候てうち合いたし遠敵也永嶺は自身ミニイケルにてうち取首をも取
 り大に功名いたし候アメリカ南北之戦にて陸戦に輕便之筒發明いた
 したるにて可有之い才聞繕ひ悉敷可申越候我等存るには臺はコバ臺
 行軍臺等を斟酌し筒を西洋の筋付にいたし百目位なれば可宜哉車臺
 にてはとて輕便には有之間敷存候此節之戦にてヤリ具足は廢り可
 申ヲカンキ咄様々有之候小銃はミニニエルに歸し可申候

一五穀を初日用之物品金銀銅鐵材木等何に寄らす根段委敷聞繕可被
 申越候尤茶之根段上中下能々しらべ可被申候岡田拙藏歸國にて承り
 候えはフランススイキリスにては十分之上茶を珍重いたし根段も格別
 に高價之由是は唐國より差し送り候上茶にて可有之候是迄長崎之摸
 様にては宇治製杯の上茶は用ひ不申一統用ひ候下茶買入候間茶之方

は甚以不案内との咄しのみ承り候岡田咄しとは大に間違候アメリカも風俗は英佛と同様に候えは委敷可被申越候
 一御國近來米之根段二百三四拾目迄上り申候諸物も是に釣り合何も上申候百姓は大に仕合にて珍重々々大豆類は外國に用ひ候ものにて有之候哉御國之品物にて其許にて専ら要ひ候もの茶ロウ之外何物にて候哉シヨウイ之類は如何に候哉是又委敷吟味之事
 一新聞紙之事諸物之根段等疑敷見え候事有之翻譯之間違敷又は奸商之所爲なるや聞き正し可被吳候
 一軍艦賣買船共に大小新古精粗様々なれば根段も又様々なる可し然處其許新造之根段軍艦何十間大炮何十門なれば幾位程賣買船も又同様且アルムストンク〇ミニエルの類アメリカにて専ら行れ候大小砲新製にて註文いたし候えは幾位程と申候能々聞繕可被申越候
 一前條小倉外郭迄自焼と認候處矢島源助昨夜参り承り候えは本丸共

に自焼いたし家中惣人數中方々に落候由御國へは前條之外末家二ヶノ主従男女懸り参候由御人數引き擧は右之落人之混雜にて甚た難澁いたし候由様々之咄しにて一向に取り認出來不申候源助咄しに薺州へも長より押懸り何と歟申所城下より二里計迄乗り込申候處廣島の城は紀州公に守らせ藝之人數は盡く出張いたし防戦なんなく長勢を防留め對陣いたし居候由家中家内は最寄々々の山林に隠し置候由終始之處如何相成べきや遂には落城に至るへきと存候源助は入夫宰領にて小倉に参り居大心配いたし候
 一萬國公法と云書手に入候是は原書はアメリカ之惠頓^{ワシントン}氏之著書にて歐羅巴各國の人物諸國交際之道を論辯いたしたる書にて當今專流行之學問と存候唐國にて翻譯當春江戸開板萬國交際には尤も需用にて定て其許にても流行と存候其外此類の書様々可有之又此學術は定而一科に立候事に被存候心を用ひられ度存候

様々申度候え共限り無之此段迄申縮候何も後便可申入候已上

八月八日

小 楠

左 平 太 殿
大 平 殿

尙々水土異なり候えは別而自愛祈申候此許當夏は痢病等流行いたし候え共留守は勿論縁家心易き所迄何之さし障り無之尤小野殿カク症さし重り先月益後に死去に相成候

一前條に申遣候其許書狀熊本政府之事は何も無事に候参り候えは必ず政府にさし出候間君上の御覽に入候必定にて其心得可被致候何事も明白に認め可被吳候

一前條小笠原閣老は上阪と認候え共長崎より申越には長崎に被参候由肥前筑前を相催し尙征長之存念と申事に候え共其實は大狼狽にて上阪も出来兼候様子也

一大阪より急報有之一橋公將軍職御内命之處一切御受無之徳川家御相續迄御聞入是迄因循虚張之幕習御一新天下之公論を御用天下と共に天下を治る之思召之由尤征夷之職掌は天下に御撰可被成どの思召断然と閣老并會桑に被仰向候由然し長州は尙御征伐の御所存にて既に當月廿日大阪御發途藝州へ御下向と一昨日に大阪より申参り如何之思召に候哉甚致疑惑候此方様よりは御二方様御英断にて是非々々征長御留之御國議一定いたし昨日小笠原美濃殿御使者として急速出立上阪被仰上答に候

一越前三岡列御免許平生之隠居也春嶽公は大阪御出方也越よりは八木八十八又々長崎に再遊近日沼山にも参候筈也八木より飛驒主馬初何もより書狀送り大に都合宜敷段申参り候柳川も大分宜敷相聞候一牛右衛門十分之はたらし山田嘉悦も同様也
一江口榮治郎アメリカ渡海之打立いま決定はいたし不申候

一若殿様頁公子今日より蒸氣船にて長崎に御出懸四五日御到留何れ
外國人杯へも御應接も可有之候
一橋公御家督甚非常之御存念征長は大方御止に相成可申候何れ天下
も一新更始可致御國御二方様御英明何れ政府之舊習漸々一新可致候
兄弟純一之修行是祈候
様々申遣度候え共此段申縮候也

八月十八日

書狀追々に相認何も致前後候十月初頃は書狀仕出し可申候事
追達本書認終り候處に去る七月二日發バタヒヤ港より之書狀到着先
々無事に同所迄到着珍重に存候い才申越之趣うち寄り致三讀數日之
風波別而甚敷いか計苦勞と察入申候船將壯年格別之長達感心いたし
候且又バタヒヤ之光景國主之叮咛一々驚嘆之至に候被申越候通りに
ては十月終り迄にはニヒヨロクに着と被存候至誠院様より此節之御

此書同前當時
喜公將軍職繼
征長の末局京師
の景況幕府の衰
隱小倉の困難薩
越の藩狀肥後日
事情等其れ他常
の概畧を粗述し
たるものなり

返事は不爲成候間拙よりよろしく申遣候様との事に候バタヒヤにて
さへ右之通に候えはニヒヨロクに着にてはいか計之美麗成る事や想ひ
やり候何もく不遠到着之書狀相待入候此許之成り行も天下治亂之
分界來月中には相成り可申候來月末迄には當書狀仕出し可申候此段
迄申縮候事

廿九日認

兄弟へ與ふる書

小 楠

一筆申遣候此砌愈無事に被相暮珍重に存候留守中至誠院様初め参ら
せ小供に至る迄聊相替り不申安心可被致候扱ニヒヨロク到着も十月
廿日前後と被存今頃は分居り合に相成たるにて可有之書狀も不遠
参りいかの安住にて候哉又は學校出席等何邊之事共承り可申と屈
指相待居候
一京師橋公御相續後武備節儉は非常に御改正平生御行列御側鎗一本

之外諸道具一切廢せられ股引半切にて下着は惣而ツ、ホッ袖に相成候夫故會桑等も同様にて大抵西洋家に歸し京坂は砲聲之絶間は無之候○先達而勸修寺之宮を初廷臣二十餘人蟄居閉門等被仰出候是は長州征伐不同意且つ薩へ同意之人々にて徒黨を企て異議申立候趣にて之御辭令と承り勝先生長州へ被差越長の申出取り上げ歸りに相成候處甚不首尾に相成り御斷りにて東歸被致候將又小笠原閣老小倉之不都合にて一旦御役御免之上閉門被仰付候處尙又近來御召に相成候是等にて幕之景色相見え申候十八大名御召にて其之助様先頃御上京御非政筋被仰上直様御歸國九州中は薩肥初大抵上り無之當時上京は加州藤堂世子筑前之世子備前侯上杉侯雲州侯是迄之由加州侯は何歟存念被申達十二月中旬歸國其外の御方々も皆々歸國御願立に相成候由是よりは上京之大名は有之間敷候○兵庫開港外國より近々申出候由にて既に近々に異船も參り談判も有之筈之處夫は相止と相聞え候幕

は朝廷に追從にて鎖港の説主張の由右等の次第にて何之條理も無之ゆら／＼として一日々々押移り終には兵禍にも相成扱々致方も無き世界に候

一長州は寄手藝州表引取候後彼表之戰爭は相止候え共小倉どの取り合追々有之終小倉大敗にて國境迄被追詰候處小倉より和を乞ひ何と歟申川を界に關門を立互に戦は相止居候處長より熊本に被參居候世子を人質に遣し候様申向て左様無之候えは直に戦を始るとの申懸にて先日小倉より使者を遣し嘆願いたし候熊本にては致方無之右使者薩州に參り候に木村徳太郎坂本彦兵衛被差添當時薩に參り居如何成り行可申哉いまた歸り不申候

一薩州は自國取り堅め國論一定いたし彌以富國強兵に取り懸り西洋器械も大抵取り寄せ洋人も四五輩呼寄せ操練等甚盛大に相成候家中若者共は大抵洋服截髪いたし候是迄國中旅人は嚴禁之處鹿子島内は

勿論何方もさし許候故諸國商人退々入込み城下杯は日々にきはひ
 侯國論大にうち替り智術計策にて行れざる事も合點いたし何も誠心
 公平之處に一統歸侯由必竟は大隅公非常之人にて此地にかたまり珍
 重に候當君も餘程宜敷日々政事堂に出方自身上聞候也近頃訴訟箱を
 被出下情を聞もし聞かれ候主意に付いか成下賤よりも言上不苦毎朝
 自身開封被致候是等は近來之美事也
 一越前も次第に回運に相成り候先達下山尙長崎へ参り歸り懸に此方
 に立寄御家老中より之傳言にて當今之存念承り度旨に付い才咄合且
 書附をも遣し直に春嶽公に相達し其節は春嶽公在京也候筈にて上京いたし候處
 既に春嶽公は御歸國にて直様福井に歸り拙者存念之趣先御家老中に
 相達し候處直に兩公の御聽に達翌日下山を御召にて段々書附に付き
 御尋有之深く御感心之御様子に有之候夫のみならず拙者起居暮し方
 等委敷御聽き被成候由然處一昨日越より御家老連名並御側御用人等

敷通の書狀参り先頃下山に傳言之献白之次第兩公深御感悅被成吳々
 禮謝可申述且又以來存念有之候えは乍筆勞申吳候様當年柄暮し方如
 何と被思召候て金子百兩御送被下旨申來誠に存懸け無之大慶に候其
 上社中何もより五十兩相送り此節火急之飛脚にて一統申合出來兼候
 間追而當金子さし出可申との事也社中は飛驒主馬豊後初牧野三岡松
 平列彌以心術の一途に歸し集會も甚盛成事之由別而三岡修行之功夫
 實地に歸し以前とは人物大にうち替り候趣也當時市在一統三岡を景
 慕すること甚敷家中も十に七八は三岡々々と申候何れ不違復職可致
 候右之勢にて當時に至り上にも下にも聊も嫌疑は無之候松平去月初
 參政に被命候源太郎はよ程人物も進め一統之依頼と相成り候由
 一御國許何之相替り無之政府は全因循別而政府中一人之人物も無之
 先は道家一人也此道家も當時は京師に相結中々否塞甚敷何とも可申
 様無之候乍去世子良之助様へは政府之因循内輪之情實迄具に御承知

に相成實學連にあらされは人は一人も無之深く一國之情態を御見ゆ
き被遊候え共只今御人之黜陟有之候ては物論沸騰に御恐れ一日々々
と御押移り機會御待被遊候御様子也米家虎之助殿を養子に被致御家
老見習被仰付左馬助改名此人非常之人物先監物殿よりも勝れ候而其之助
様へは別而御懇意にて無内外御うち明し御咄も有之候拙者へは別而
信せられ元田中次にて萬事計り合被申候間存付候事は一々此人に申
達直様其之助様御聽に相達し候是は極密いたし候當時は誠に大因循
に候得共何れ二三年内には必ず變態可致候一昧之人心はよ程振り立
候内御番頭組脇別而折合宜敷組脇は一致いたし講習討論も無遠慮場
合に至り必竟は神足十郎が力にて有之候
一長崎より下の關をさし塞き運漕出來不申候に因て九州北國商船一
切塞り京坂穀類大に乏敷夫のみならず八月に五畿内より北國筋に懸
け大風雨有之何方も洪水出候而田畑殊之外之損失に相成候近江の湖

一丈八尺と申事にて越前は風水殊に甚敷二百年來絶而無之大害之由
右等にて當時大坂之相場三斗五升米にて六兩迄上り申候九州中は風
水之害は無之候え共一昧不宜御國內阿蘇南郷別而不作にて有之候當
暮之御双場根段三百五十目に相立候下た方大困窮に及候必竟大坂米
價之沸騰は五畿内北地風水之大害とは申候え共北地は越前迄大害に
て加州より先は格別之損失は無之由にて此害之懸る處は七八ヶ國故
日本一統にならしては十の八九分に至候えは是程之困窮に至るへき
様無之唯々下關塞り候而穀類之融通無之候故大坂の功乏敷相成如此
馬鹿らしき根段に相成候九州中は下た地穀類は餘計に有之候故地双
場は二百四十五匁程にて格別に上り不申候夫も一切買ひ手無之持居
候而百姓共は却而難儀いたし候夫々大坂に釣り合三百五十目に御双
場を相立候間きんにては無之穀類持ながらの大きんに相成り錢
と申もの一切乏敷百目の高もかり出し兼候程に有之候扱々不思議成

る年越にて候
 一其許落着如何様之成り行に候哉日々其尊のみいたし候當時之勢不
 相替盛大なる事にて可有之最早南北戦争後之終末は何も相治り南方
 人心も落着たるにて可有之將又政事向諸般主向漸々熟知可被致言語
 も今頃は大方通し可申候定而可然人物様々之事に存候乍去來春中頃
 迄は熱戀之人も思ふ様には出來申間敷萬端困窮之事のみと察入候然
 し暫も居合被申候えは漸々戀意之人も出來可申候
 一萬里之山海隔り候えは山川草木何も歎も異類のみ多かるべし乍去
 人は同氣之性情を備へぬれば必ず兄弟之志を感じ知己相共にする人
 出來するは自然之道理にて却而日本人よりも外國人親切なる事に被
 存候申迄も無之候え共木石をも動かし候は誠心のみなれば弱する時
 も誠心を養ひうれしき時も誠心を養何も歎も誠心の一途に自省被致
 度候是唯今日遊學中之心得と申にて無之如此修勵被致候えは終身之

學中今日に有之航海之藝業世界第一の名人と成り候よりも芽出度か
 るへし

一諸般之事共聞結等之事は先便に申入候間何も略いたし候何れ來春
 早々可申遣先此段迄何も申縮候也

十二月七日

小楠

左平太殿

大平殿

尙々此許社中何も無事に居申候必ず々々精業相勵之程祈申候先便に
 も申候通其許之紙而は上にも差出候事故くはしく被認且御國之杯忌
 諱に懸り候様之事柄は別紙に認られ候様存候何も來春に付し申候也
 兄弟へ與ふる書

一書申遣候時分柄愈無事に被致精業珍重之至に候留守中至誠院様初
 め參らせ小兒に至る迄聊御替り無御座皆々御康在被成御座候間安心

同前
 時に事勢初春に
 變し殆ど爲すべ
 からざるが如き

の山の日なり先生沼
其群悉を得る能
はすき雖も天
下の人心及事状
共に紛々として
分裂せしむるに
海軍に在りしは
一を謀るの經綸
なり此書其意中
の計畫を露出せ
ざれども以爲ら
ざるの時す可ら
する其概畧見る
足り

可被致候以先便政府より御助力之事御詮議相決し此節アルヘツキ手
許迄御遣しに相成同人より取計ひ其許に相渡し候手數に有之此節夫
々受取被申候事に存候誠には迄之艱苦押計られ候處此御助力にては
氣寛不申修行可被致難有仕合に被存留守中皆々安心いたし候近日に
社中並縁家内へ神酒を上げ申答にて有之候
久々書狀参り不申何れ不遠参着いたし可申相待居申候最早大分月日
も相立言語も漸々通し候様に相成たると被存候學業も定而入所等被
心得候事に存候
此許京師漸々都合宜敷幕府大分之御悔悟にて薩之御疑惑も大に融解
に相成り候に付大隅殿先月末上京土の容堂公宇和島老公等上京其外
越之當公尾之老公阿波備前等追々上京之筈いま薩越等上京之後之
次第は相聞え不申候得共此節は幕庭右之通りにて内外之差別無く御
相談に可相成中々一致いたし候事に被存候左候えは海軍も起り可申

大分都合宜敷致大慶候幕府御手許御改正は誠に驚く計に参りい才は
先便に社中より申遣候通に候夫等之節は彌以被行能々御精神も屆候
事に存候此上は外藩御一致御手許御非政筋御改正公供之御政事に歸
候えは不遠邦内治平可致候五卿も歸京に相成候是は薩之心配と被存
候十七卿も御免と相聞え候
兵庫開港之事先頃幕府より朝廷に御建白有之十分之理を盡したる御
書附にて致感心候朝廷より當諸大名に御尋有之大名何方もさしたる
異議無之皆開港之議にて候京師之勢諸生輩迄鎖港之説は一時に消亡
と承り候
内藤泰吉又々京師詰被仰付二月初に此許出立其節老拙存念薩越へ申
入置候二藩之存念有名之大名被召寄御政事御相談并列藩有名之士被
召寄候等之趣意にて實は押結候條理に至り不申老拙存念は事業を離
れ坐論に相成候にて却而紛々を生し其益有之間敷海軍局を被建大樹

公大總督有名之大名薩越等之如き參豫旗下并諸藩有名士被召寄上中
下院にて御詮議有之度一之海軍より富國に及ひ外國萬端に至り此に
まさるは無し日本之大政府と云へし去れば匹夫たり共直に大樹公え
も御面謁不苦尤公卿も此に御出方にて公武外藩貴賤共に公供之政事
に歸し可申候大趣意也泰吉書狀昨日社中手許迄は參り居候由いまた
承り不申候

熊本は先便に社中より申遣候成行之末米卿御家老御斷に相成候當時
は溝口隱居専全權にて有之候隱居二千俵にて小笠原上座御家老被仰
付依然たる俗習にて政府中道家一人頼み有之候いまた小倉武功も御
賞無之列藩よりは大因循國と稱し申候然し若殿様良之助様は必ず夫
々御同意と申にては無之候え共致され方無御座御様子に相聞え候夫
と云ふも一統の人心向ふ所夫々有之御英斷出來兼候勢と被存候然し
是はわけも無き事京師之御都合さへ彌宜敷一新再興いたし候えは直

に夫々應しどふともこふとも相成は眼前之事にて聊以氣遣は無之候
江口榮次郎彌以アメリカ遊學に相決し七月初迄には御國出立之筈に
候此節は航海には懸り不申商法脩行に申談し當人も夫に重々同意い
たし候横濱にてアメリカ飛脚船出來不遠乗り出し候様子にて大方此
にて出帆可致候此に引き懸り居候は金子にて是も大抵出來之見込に
候申述度義は山海に候え共何も大畧いたし此段迄申入候事

四月廿七日

小

補

左 太郎 殿

三 郎 殿

尙々彌以自愛脩行可被致候小川御袋様御逝去残念に候其外縁家中も
替り不申候
當年は宿本にて茶製法に取り懸り大分宜敷出來いたし候江口出立之
節は遣し可申候

何なりと草木之類珍敷物種子にて苦しからざる品幸便も候えは送り
呉られ候様に存候尤給られ候もの可然候事

兄弟に與ふる書

一書申遣候時分柄相替り不被申精業可被致珍重に存候留守中至誠院
様初め參られ小兒に至る迄聊相替り不申安心可被致候然者去十二月
晦日并三月五日認之書狀當月中旬に相達被申越候次第夫々承り候第
一其節迄此許書狀到着不致段いか計之案勞敷と押はかり入申候此方
かは去冬迄に數通之書狀仕出し其後も追々節々に仕出しいか成る間
違にて候哉誠に心外千萬に存候フルベツキ手許へも精々申談以來無
別狀到着いたし候様頼み入候事に候
御助力之事政府無異儀相濟當月六日に金子フルベツキに御渡に相成
候間何れ不遠相達候事に存候是も段々及延引候え共夫は致し方無之
右金子到着迄之心痛想像いたし候

同前二姪より來
書の旨趣を喜び
粗自家の意を吐
露せしものなり

西洋列國利の一途に馳せ一切義理無之就ては二典三謨熊澤書彌信仰
之段甚以致大慶候此許にても夫のみ及講習富國強兵器械の事に至り
ては誠に驚入たる事業にて今日程盛大成るは前古々無之至れり盡せ
りと可申唯此一途のみ取り用へき事にて道に於ては堯舜孔子之道之
外世界に無之彌以分明に候一言にて是をいへは西洋學校は稽業の一
途にて徳性をみかき知識を明にする學道は絶而無之本來の良知を一
稽業に局し候得は其藝業之外はさそかし暗き事と被察候既に西洋列
國是迄有爲の人物を見候てもアレキサンデル、ペイトル、ボタマルテ杯
之類所謂英雄豪傑之輩のみワシントンの外は徳義ある人物は一切無
之此以來もワシントン位の人物も決して生ずる道理無之戰爭之慘怛
は彌以甚しく相成可申候我輩此道を信し候は日本唐土之儒者之學と
は雲泥之相違なれば今日日本にて我丈を盡し事業の行れざるは是
天命也唯此道を明にするは我か大任なれば終生の力を此に盡すの外

念頭無之候近來に至り越前は十分此道に興起いたし春嶽公も餘程御都合よろしく三岡列道之一途に歸着いたし候
 嶽公は追々御下問参り或は書上或は社中上京の節夫々相達し深く御信用に相聞え致大慶候京師の成行とても見込無之の才は社中申進候間何も略いたし候
 御國許依然たる光景は勿論也然し其之助様へは別段御心被爲在左馬助殿へは何も御うち明御話し合有之候本々政府へは一切御出方無之候夫故越前之取り合京師之事情等此方を相聞え候は御内々にてさし出申候其許此節の書状もさし出候間以來共に其心得にて認め可被申候段々申度事山海に候え共此節は極く急きに認候間何も略いたし候以上

六月廿六日

兄弟當

小補

此書は在京中の家書なるを以て當時の事情は尋常なれども但し主上聖徳の光輝を親ひたるまゝを寫し出し竊かに御英相を拜する能はざるの情を以て見るべし

尙々申迄も無之自愛第一に候此土に無之野菜物歟何にても實まき出来候もの贈り呉られ候様存候花類にても桃杏もも之様成る物何にてもよろしく候
 茶は長崎唐土杯にてロバ杯が仕入候外に上品も行れ候哉根段いか計にて候哉承り度存候以上

宿本に贈る書

先月廿一日之御狀到着難有拜見仕候時候益御機嫌能奉恐悅候隨而私事相替り不申御安心可被下候先日宮川急歸にて最早到着と存候此許の成り行い才御承知と奉存候引き續き庄村歸省是又同様其後格別相替り不申候

左京亮様初薩阿二候御東下阿と左京様は今明日に此許御立大阪より火船にて直に江戸に御發向なり江戸は去る十五日に上野に集り居候賊御討伐官軍大勝と相聞え申候三公御到着の上は江戸丈は彌以治平

可仕候其上にて會津御征伐に御議定に御座候仙臺米澤杯大分賊に應し候え共是は會津落着いたし候えは治り候に相違有之間敷候暑中出軍實以痛心の至に御座候

禁中日々多事繁用誠に困り入申候然し前にも申上候通り

主上日々御出座議定參與被召出萬事被聞召候私共罷出候所より者玉座は一問半位八疊之御間に中央に高き御疊二枚敷き御敷物何歟薄き一

のな外に御たばこ盆丁度私之物位なり之のみにて御近習衆も一と間隔て二三人も扣へ被居候私共は御居間之下御敷居の下とに罷出申候參議一同に罷

出候時も有之或は一人罷出候事も御座候千餘年來絶て無之御美事に御座候御容貌者長が御かほ御色はあさ黒く被爲在御聲はあほきく御

せもすらりと被爲在候御氣量を申上候えは十人並にも可被爲在哉唯々並々ならぬ御英相にて誠に非常之御方恐悦無限之至に奉存候

先頃申上候御かたひら染出來さし上申候色薄く候え共是は御許の流

御氣量さは龍顔
を云はれたるな

行にて御座候地あひわらく敷如何に御座候え共不思議の拜領物誠に難有御品にて目出度御着用被成度奉存候あいつに木綿ちぢみ遣し申候

至誠院様御たばこ入延引仕候是等は四條三條之橋きはに有之候え共みせに出し候ものはよろしく無御座候註文仕管にて何角押移り申候何れ不遠さし上可申候

又雄釣りの獲物并にえび恭候早速給へ申此頃之大水にて肴類一切無之大に難澁仕候湖水一丈五尺淀川一丈以上にてとも切甚敷いか計之手入に有之哉難計通船今日より明き候由大坂は今以水につかり居申候非常之出水百年來無之事に御座候當年は九州筋如何北國越前杯は田うゑ兩度いたし其上出水にて最早うゑ付出來不申由甚以恐敷事に御座候御許如何定而庭前大水と想像仕候何れ近日には何方よりも申參り候事と存居申候

新堀手島目出度必竟若殿様非常の御聰明故にて重々奉感伏候此上隠居病氣快き方いのり申候其外何角漸々うち替り可申候若殿様をも御召にて何れ不遠御出京可被在重々御待申上候追々申上候たばこ切には大に難澁仕候此許之品は貳歩以上にて無之ては給られ不申夫も口に逢ひ候品は無御座候定而小澤源太持參可致相待申候先此段迄申上縮候頓首拜

五月廿四日

横井平四郎

至誠院様

あつせ殿

又雄殿

尙々乍憚御自愛專一に被存候私も淋病寸斗勝れ不申是には困り入申候日々すわり或は終日夜にも懸り候位にて實にいたし方無之候夫故何方へも参り不申酒も至而少々ぬまへに給申候然し外に申分は一切

此書同前簡畧なれども當時の事情に關するを以て載録す

無御座御安心可被下候

又雄讀書修行且英學決しておこたり不申様吳々申入候自然おこたり候えは直に御申越し可被下候夫々存念有之候彌以出精いたし候えは墨筆之類は申に不及色々之書物下し賞美可致候みなさんおこり御申聞け聞き不申候えは先頃遣し候かたびら御取り上何も御遣し無之様に存候人物宜敷相成り候えは衣類其外様々之くわし遣し可申候事

宿本に贈る書

返し此許大小大名四十三藩出京にて市中賑々敷事に御座候一鉢は無事靜成る事に御座候市中しまり等大に行届き申候事

早立候に付一書奉呈仕候秋冷愈増御安泰奉恐悦候隨而私儀相替り不申御安心可被下候然し追々書狀仕出し置新堀隠居迄頼置候處于今引懸り居候由何角御懸念も可有御座候御許御書狀も久敷参り不申御國許御役替等うち替り候段想像仕候此許は太政官彌以御都合宜敷昨日